北支

現地編輯

THE NORTH CHINA

3

4

北支の歴史

漢民族の發生と

國家の組織

1

世界の三大文明は申し合せたやうに大河の流域にその美はしい花を咲かせた。即ち一つはエジプト文明の發生地であるナイル河の流域であり、もう一つはバビロニア、アツシリア等の文明培養地であつたチグリス、エウフラテスの流域であり、他の一つは支那文明の誕生地たる黄河の流域である

現在の支那の中心種族をなす漢民族が黄河の上流地方から陝西、河南、山西、河北等の地方に居を移したのは、大凡四千年から五千年の古へにあると推定せられる

當時の漢民族は今でも陝西、河南、山西の諸地方に見られる黄土層の崖地を掘つて穴居し、獵や家畜を飼つたりしてゐた。その時、有巣氏が出て、木を構へて巣を作り、木の實を食ふことを教へた。又有巣氏の次に燧人氏が出て、燧石を以て火を起すことを教へ、燧人氏に代つて民を治めた伏羲氏は網を用ひて獸魚を捕へることや、家畜を保護したりする道を教へ、結婚の式を始め色々の禮式を定めた。伏羲氏のあとに神農氏が立つと農耕の法を教へ、百草を嘗めて醫藥の術を弘めたと云はれる

初め漢民族が黄河の流域に移住してきた當時、既に苗族が住んでゐたが神農氏を經て軒轅の頃になると漢族は苗族を完全に南方に追拂ひ黄河の流域の肥沃な地域に土着し之を勢力範圍としたのである。軒轅は後、衆望を負うて天下の位に即き黄帝と號した。黄帝はその後都を涿鹿に定め、宮殿を造り官服を制し、それから暦を作り音樂を肇めた。また舟車を作つて交通の便を開き貝を以て錢とし、市場を設けて交易の道を教へた。黄帝の妃嫘祖は蠶を養つて絲を取ることを知つた。又蒼頡が鳥や獸の足跡を見て文字を考へ出したのも當時のことである。この様に黄帝の時代になつて支那は初めて國家を組織し、同時に人文技術が著しい發達を遂げた。支那人はこの黄帝を以て建國の祖と仰いでゐる

伏羲、神農、黄帝を三皇と稱して尊崇はしてゐるが黄帝以前の記事は人文發達の徑路を示す爲に附け加へられた後人の記述に過ぎない

年代表

日本	支那	西暦
西紀前 660	春秋戰國	400B.C.
上		300B.C.
	250B.C.	
	207B.C. 秦	200B.C.
	前漢	100B.C.
0	24A.D.	0
	後漢	100A.D.
古	220	200A.D.
	264 三國	
	西東晉	300A.D.
	419	400A.D.
592		
飛鳥	南北朝	500A.D.
710	588	600A.D.
	616 隋	
奈良 781		700A.D.
平安 859	唐	800A.D.
藤	922	900A.D.
	959 五代	
原	遼 / 北宋	1000A.D.
1183	1122 / 1126	1100A.D.
鎌倉	金 / 南宋	1200A.D.
1331	1234 / 1279	1300A.D.
吉野朝 1392	元 1367	1400A.D.
室町 1568	大明	1500A.D.
1600 安土桃山		1600A.D.
江	1661 / 1616	1700A.D.
戸	大清	1800A.D.
1868	1911	1900A.D.
明治 大正 昭和	民國	2000A.D.

北京西南周口店に於いて發見されたシナントロプス・ペキネンシスの遺骨

殆んど最初の人類とも目すべき型の人類が、既に數十萬年以前において北支に生存してゐたのである。彼等は打製の石器や骨器を製作し使用してゐた。なほその遺跡には燒かれた獸骨が見出されるところから火の使用も知つてゐたとみることができる。實に、シナントロプスは穴居して獸類を狩獵して生活してゐたものである。頭蓋骨などより見るとその外貌の上では發達の非常に原始的なものであるにかかはらず、文化的には比較的進んだ狀態にあつたものと見ることができる。

北京から京漢線で南下して八つ目の驛琉璃河から支線で西に入ると山麓に周口店驛がある、曾てその驛に近い丘から石灰石を切り出してゐたところ、石灰岩の裂罅や洞窟から先史時代の遺跡が見出された。その後計畫的に學術的發掘が十五箇所程行はれた。寫眞左方の穴はその第十五地點で深さ二十五米もあり、上に示す原始人の遺骨をはじめ、多くの遺物が發見された。

寫眞右は殷墟出土の白色土器。支那ではこれを殷と名付け、祭祀の時食物を盛るに用ひたものである。その表面に表はされた模様を虺龍雷文などと呼んでゐる。何と美しいではないか。

左は獸骨貞卜文字。古代支那では戰爭や狩獵その他日常生活萬般について卜を使つて行動を決めたものである。その時龜甲や獸骨に卜の文を記してそれを燒き、その割目によつて判斷した。

白陶の寫眞は「河南安陽遺物の研究・梅原末治氏著」による。獸骨貞卜の寫眞は「支那歷史讀本・佐野袈裟美氏著」による。

堯、舜が耕作したといふ山東省歷山地方

漢民族の發生と國家の組織

2

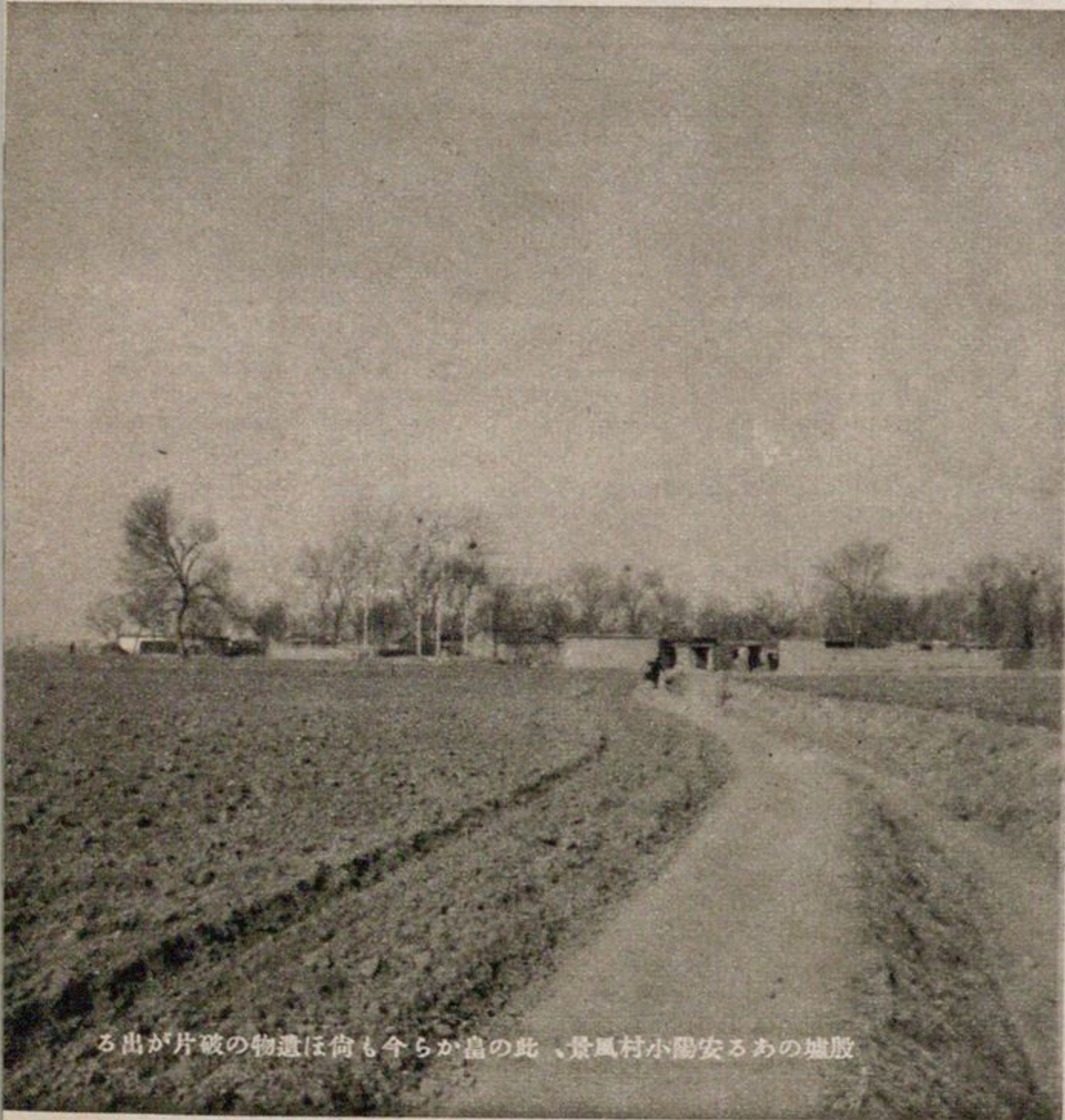
黄帝について、少昊、顓頊、帝嚳が天位に卽いた。帝嚳の子、堯は智德に秀でてゐたので諸侯から推されて天子の位に卽いた。この堯帝は聖王としての譽の高い人で當時の歌に

我が烝民を立つる
汝の極に非ざるなし
識らず、知らず、帝の則に順ふ

といふのがある。その大意は「我々民衆が每日を平穩無事に送ることの出來るのは、これ皆堯帝の賜物である。我我は格別何も考へずにやつてをるのだが、その爲ることが悉く堯帝の思召に適つてゐるのだ。まことに有難いことだ」といふやうな意味である

併しながら堯の在位六十一年目から九年間、黄河が氾濫しだしたので人民は大いに苦しんだ。その頃の黄河は今よりも更に曲りくねつた水路をなして居り、その下流は遠く天津附近の海に注いだと思はれる。その派生した無數の分流は低地や平原を縱橫に流れて廣大な沃土をつくると共に、每年河床を變へて純樸な農民達を苦しめだ。支那では「水を治めることは、國を治めることである」といはれる通り、治水は歷代爲政者のもつとも頭を惱ました問題であつた

堯帝はこの洪水の禍を除かうとして、鯀に對して治水の業を命じた。しかしこの鯀は貪欲な人物であつたから民の財を掠めるだけでその職務を怠つてゐた。そのため九年たつても防水工事は完成しなかつた。一方堯は孝行者として評判の高かつた舜を擧げて國相に任じた。(後、堯は舜の治績に滿足して不肖の子、丹朱を斥けて舜に位を讓つた)舜は鯀の子禹をして治水の業に當らしめたが禹は寢食を忘れてその任務に精勵し家を出てから十數年、黄河の兩岸を跋涉して工事を監督した。その間三度も己の家の前を通つたが一度も家に立寄らなかつたといふ程の誠實な努力振であつた。かくて黄河治水の大事業は禹の勤勉とその人德とによつて完成した。そこで民衆は何れも禹の德を讚へ堯、舜と共に支那聖王の典型と仰いだ。やがて禹は舜の禪をうけて王位に上り都を安邑に定め國を夏と號した

夏の十七代の王に桀といふのが出た。酒色を好み怠惰で貪欲で殘忍であるといふ風にあらゆる惡德を具へてゐた王であつた。宮殿は玉や象牙で飾り立て酒で池をつくり酒粕で堤をつくり連日連夜酒宴を開いて豪奢淫樂の日々を送つた。そんな有樣であつたので政治は甚しく亂れ民心は全く彼を離れて仕舞ひ遂に殷(商)の湯王に滅ぼされた。湯は堯、舜、禹、湯と並び稱される聖君で伊尹のやうな賢臣を用ひて銳意國政の改革に努めた。しかし殷の末世には紂といふ暴君が現れ、稅を重くし慘虐な行ひをあへてしたので民の怨みを買ひ、遂に二十八代六百四十年で殷は周の武王に滅ぼされた

殷墟のある安陽小村風景、此の畠から今も尚ほ遺物の破片が出る

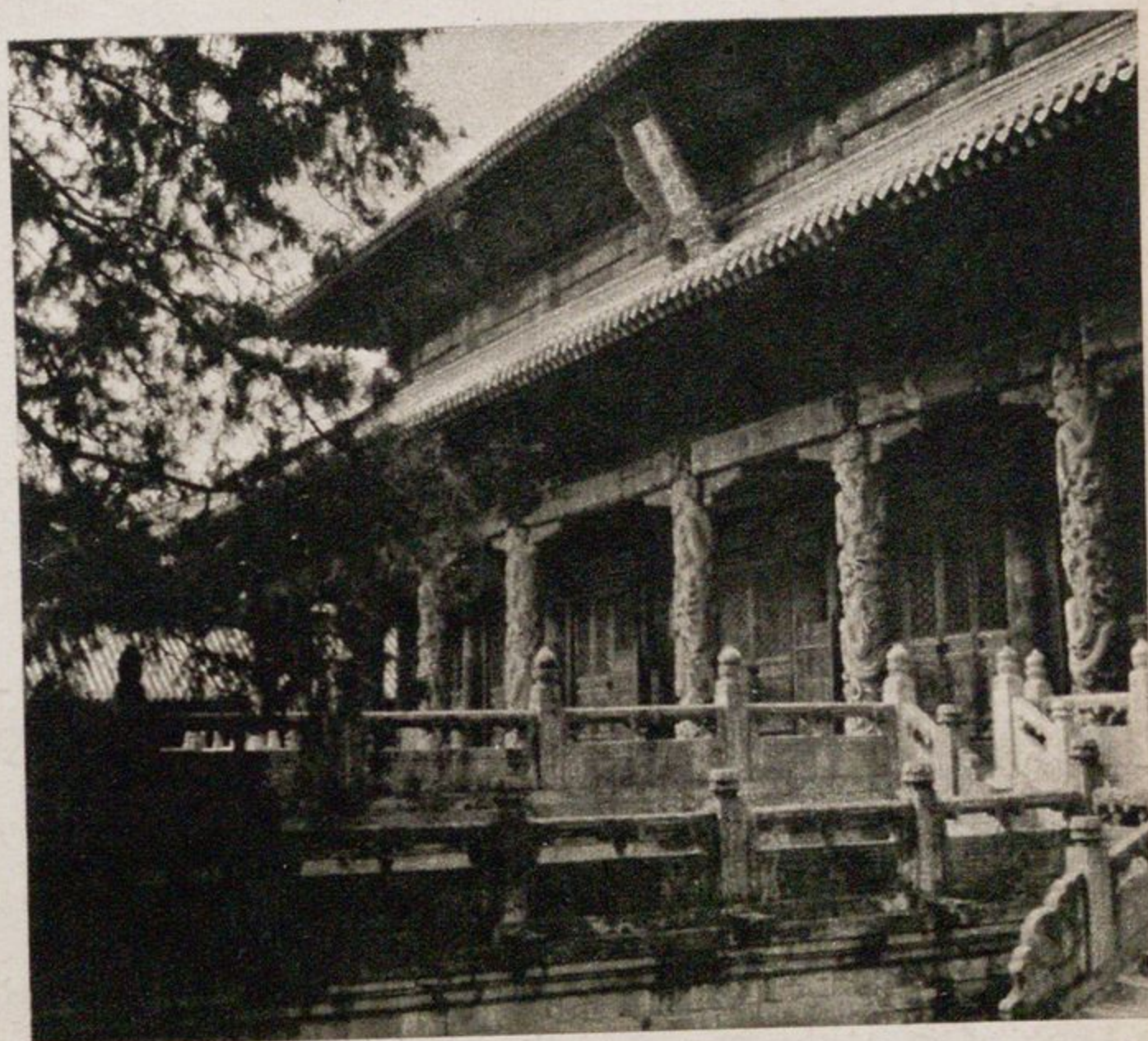
支那最古にして、民衆の最も信仰篤き山西省運城の堯帝廟

儒教の大本山たる孔子廟。山東省曲阜の至聖林中にある。そこは、曾て孔子の舊宅があつたところと云はれる。
春秋戰國の時代は弱肉强食、武力萬能の時代で、道德も地を拂ふに至つた。
從つて、孔子の說教もまた、時代の所產なのである。然し彼の說くところは當時の混沌たる社會に一つの新秩序を與へんとするにあつて、その理想は必ずしも實現されたわけではないけれども、支那の歷史のみならず、我が國にも大きな影響を及ぼしてゐる。孔子の編纂するところは多々あるが、彼のもつとも力をそそいだのは「春秋」であり、又彼の思想なり言行なりを知るものとしては「論語」がある。

北支の歷史

春秋から戰國へ

日	神武天皇即位	大和時代
支	春秋時代	戰國時代
西	前七〇〇年——前二四〇年	

周の武王が天下の聲望を集めて夏を滅すことの出來たのは、まつたく父の文王と賢相太公望との恩惠によるものであつた
武王は名の示す如く英邁勇武の人でありよく國を治めたので周の國力は日に月に强大になつて行つた
武王について成王が位についたが、幼少のため武王の弟周公旦が王を輔けて國政を見ることになつた。周公旦は至誠の人で文武の才を兼ね德望一世に高かつたが、その攝政の間に周代の制度や禮樂を定め後世に模範を示したそのため成王とその子、康王の治世六十年間は天下がよく治まり、刑法は儼存してゐたが刑法に觸れるものがなく、牢獄はガランとしてただ風雨にさらされ、牢房には雜草の花が咲いてゐた。この時代こそ周の最盛期で、支那史上「成康の治」と呼ばれてゐる。康王の後、周は次第に衰へ、第十一代の宣王が出て一時周室を中興したが、その子幽王と云ふ暗君のため周室の滅亡は度を加へて行つた
幽王について平王が踐祚した。周室は犬戎の攻擊を避けんがため洛邑（洛陽）に新都を營み西都の鎬京から遷つた。これを「周の東遷」といふ。その後凡そ三百年間を春秋時代と呼ぶ。なぜといへば、孔子が「春秋」を執筆して當時の史實に論評を加へてゐるからである。遷都以來內には諸侯が益〻割據し外には北狄の侵寇が愈〻頻繁になり、しかも周の中央政府はこの內憂外患を鎭定するだけの統制力を失つてしまつた。かくて中原は無政府狀態に

陷り、魯、衛、晉、鄭、曹、蔡、燕、齊、宋、陳、楚秦、呉、越の十四侯が互ひに天下に號令せんとして覇を爭ひ天下は戰亂の巷と化し去つた。諸侯の中で最初に覇業を成し遂げたのは齊の桓公であり、ついで晉の文公、楚の莊王、呉王闔閭、越王勾踐が覇者となり中原に號令した。この時代になると周室はあれど無きが如く天子の實力は洛邑附近の一小侯の觀を呈し勢力の交代に從つて强國の大夫は獨立して一國をなすに至つた。この頃から春秋時代は終つて戰國時代が始まるのである。そして更に弱肉强食の陶汰をうけてあとに殘つた燕、齊、楚、秦、韓、魏、趙の七國の間に百八十年間、秦の統一に至るまで天下の覇權が爭はれるのである。かくの如く春秋戰國時代は五百年もの長き間弱肉强食、武力萬能の時世であつた。從つて堯舜の道は全く廢れ實力の登龍門が開かれると同時に下剋上の惡風が社會を席卷するに至つた。しかしながらその反面この社會秩序の破壞された慘狀をなげき、道德と平和とを復興せんとする聖賢の輩出をも見たのである。即ち儒學を唱へた孔子、道學の老子、その他孟子、荀子莊子、墨子、楊子、韓非子、商鞅など百花繚亂たる思想の花園を現出した。

萬里長城は一般に秦の始皇帝の創案になるものの如く考へられてゐるが、實は始皇帝より約二百年程前から築造されたものである。それは戰國時代の列强の諸侯が自國の領域を守る爲に部分的に築造してゐたものである。始皇は天下を統一するや、國内のものが不必要なので、支那本土と北方との境のみこれを存續せしめることとし大修理を施したものである。その長さ一萬二千餘支里、山海關から甘肅省迄及んでゐる。當時の長城は更に北方にあつたもので、現在のものは大體隋代以後のものであり、今見る樣に堅固な城壁はずつと降つて明代に築造したものである。

北支の歴史

秦・漢

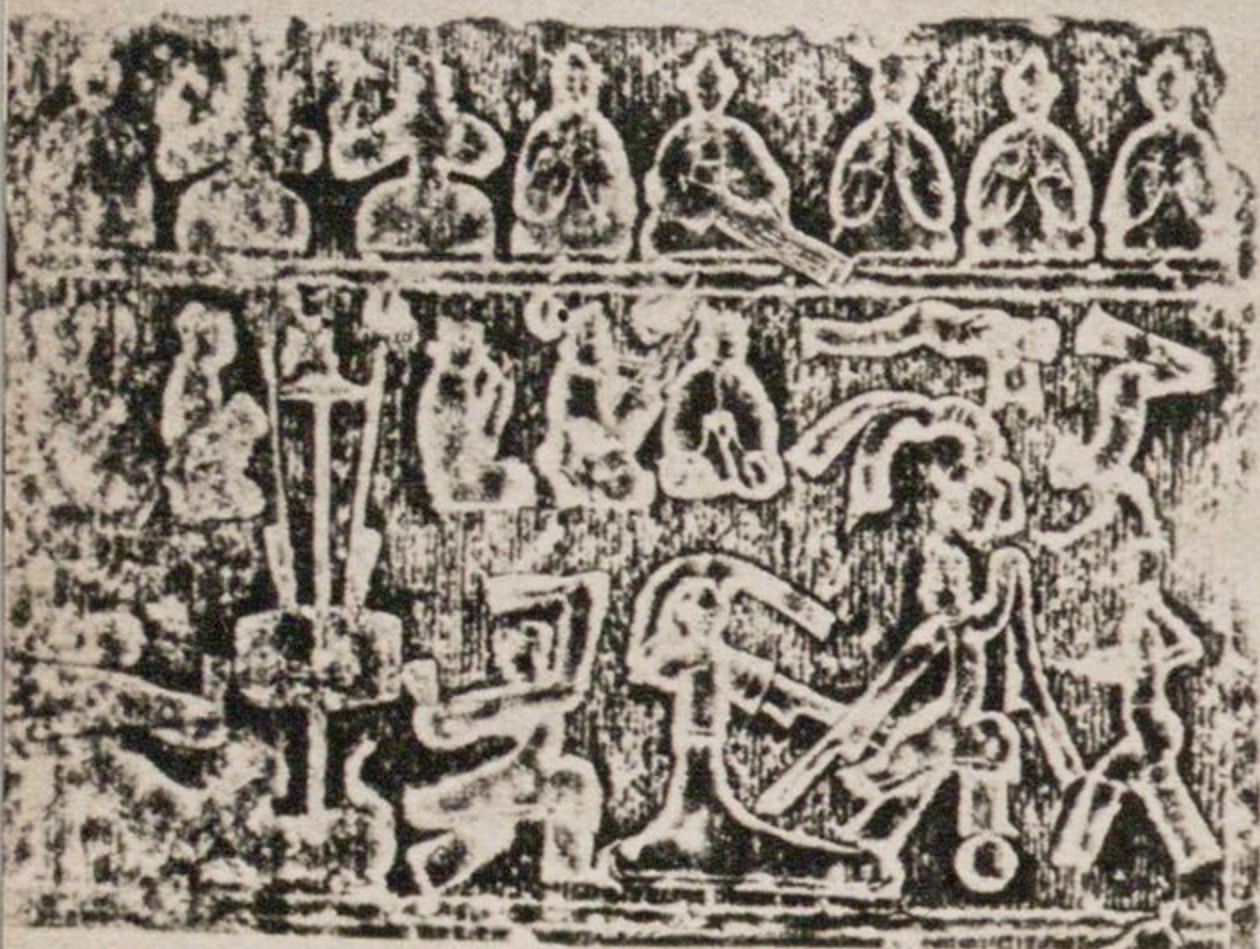
日	大和時代	
支	西漢	東漢
西	前二〇〇年	キリスト生ル 二二〇年

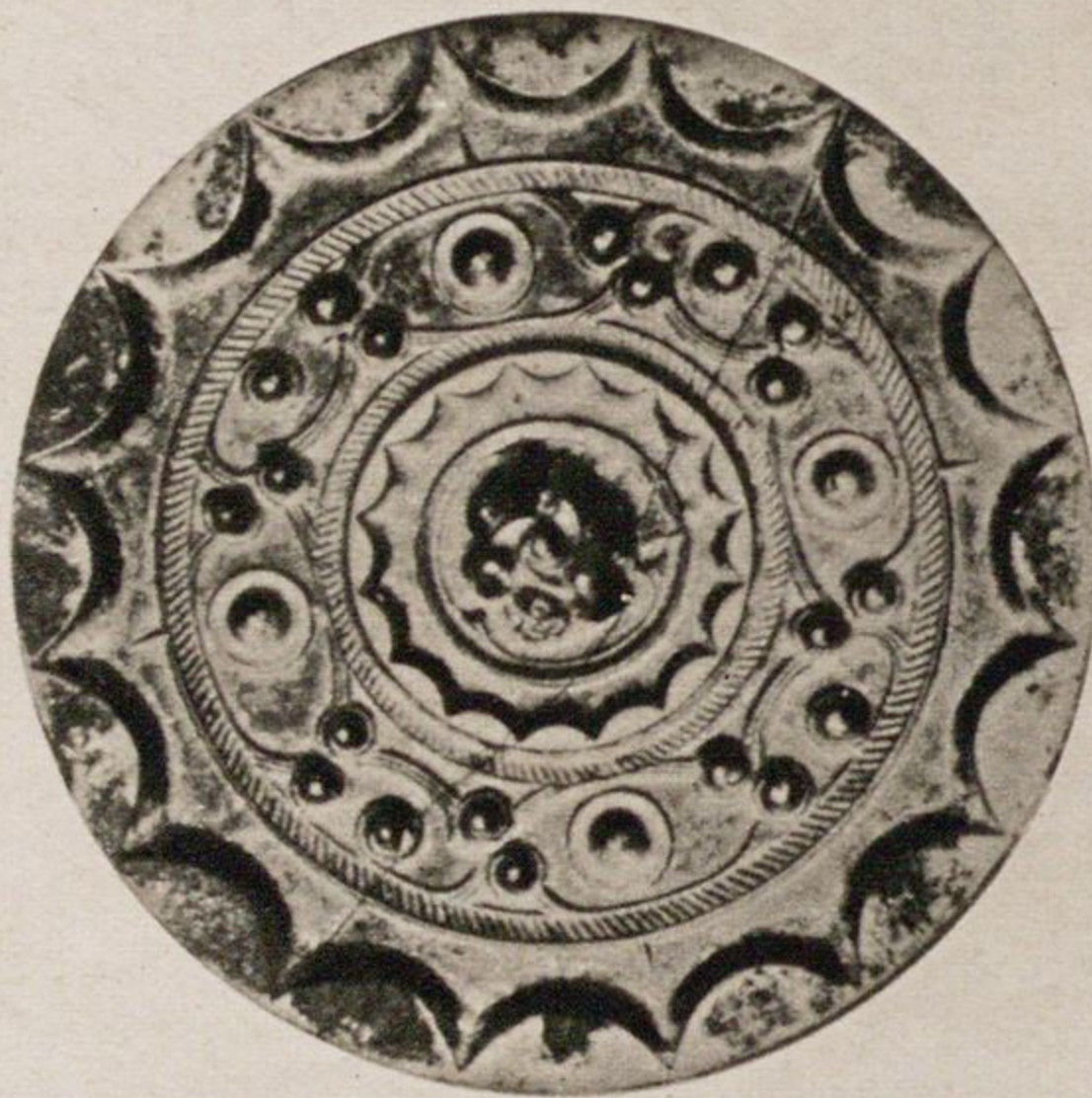
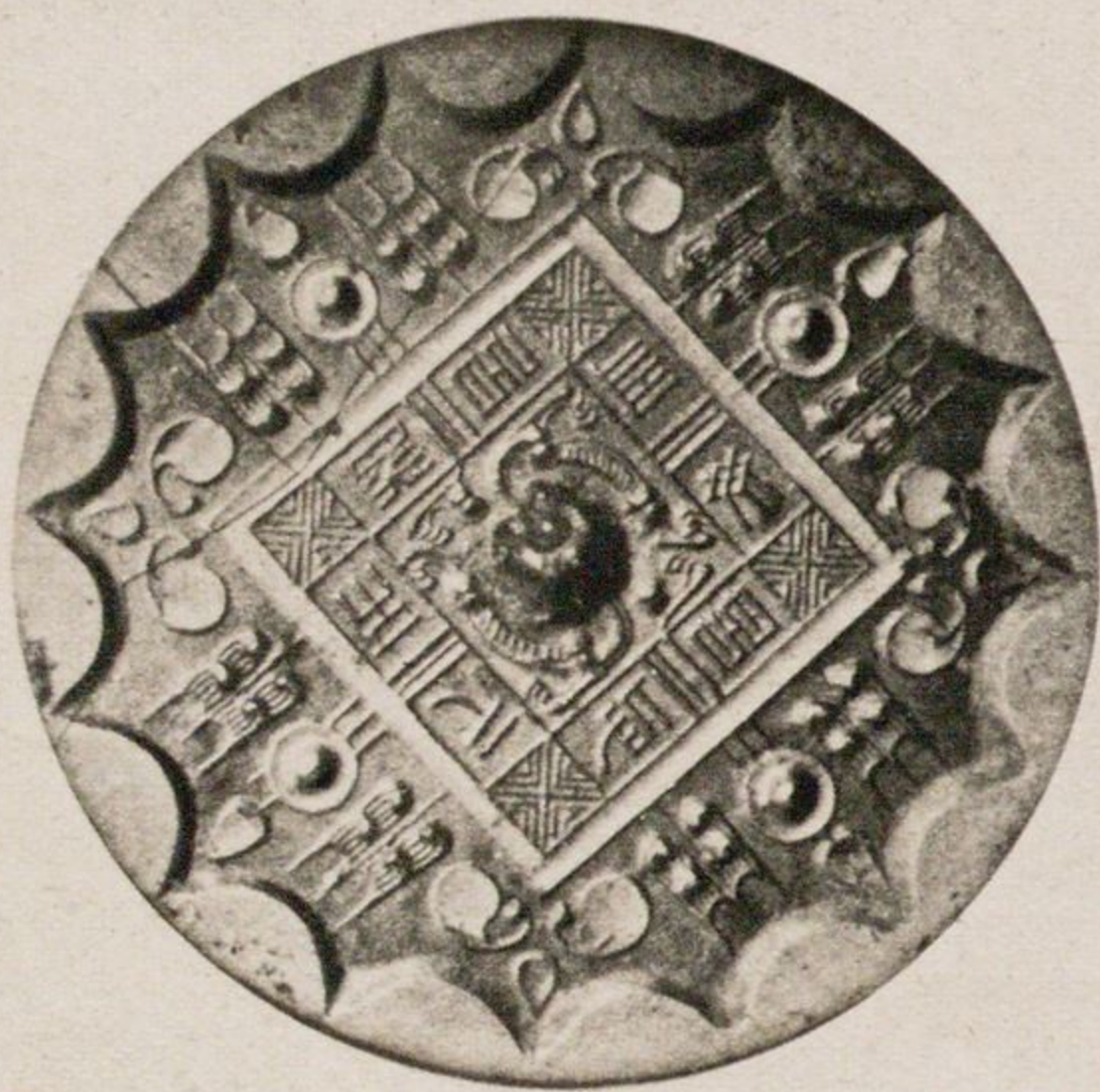
後漢の末、並び起つた群雄の中最も強大なものは魏の曹操、蜀の劉備、吳の孫權であつた。中でも蜀には關羽、張飛の如き武將があり智將には有名な諸葛孔明が控へてゐたので三國中最も强盛であつたが、孔明の死後蜀は中心人物を失ひ、到頭魏のために滅ぼされた。ほどなく魏は江南の吳を滅ぼして天下を統一し國號を晉と稱したが後、匈奴の酋長劉淵とその子劉聰によつて滅ぼされた（仁德天皇四年）。その翌年司馬睿によつて再び晉朝は興起するが、これ以後を東晉、以前を西晉と稱する

しかしこの東晉の領土は僅か揚子江の南部地方に限られ、その北部地方に匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の異民族すなはち五胡が漢土を占領してゐた。東晉は中原恢復の念願を棄てなかつたので、漢民族と夷狄との對立が展開され、一面北方に侵入し來つた夷狄の間には或は興り或ひは滅び、約百三十年間に十六國許りの國が建てられた。これを「五胡十六國の世」といふ

その後東晉はその將軍劉裕に滅ぼされ劉裕は宋（南朝）を立てた。その頃鮮卑族の拓跋珪が後魏（北朝）を興して平城に都し、その孫太武帝が江北を統一したので、ここに漢民族の宋と夷狄の後魏とが南北に於いて對立するに至るのである。そして南北朝は幾多の變遷を繰り返したあとで、最後に北周（北朝）の外戚漢人の楊堅が北周の禪を受け長安で位に卽き、南朝の陳を滅ぼして完全に南北朝を合併するが、これが卽ち隋の文帝である

南北朝時代には戰亂が繼續して民は慘禍に苦しみ親しく父子骨肉の流離殺戮を見たから、國民の心裡に厭世觀を生じ未來の淨福を欣求する觀念が盛んになつてきた故に佛教が斯かる精神的欲求を滿たすべく興隆したことは當然の心理的經過である。殊にインドや西域から異國の僧侶が來朝して說法したり、佛典を漢譯したり、佛教美術品を將來したり、製作したりしたので益〻佛教の流行を促したのであつた。當時佛教の信仰中心地は南京と洛陽であつた。後魏の獻文帝や梁の武帝は佛教の信仰篤く、この時代には伽藍寺塔が盛んに建立され、上は王侯から下は庶民に至るまで念佛讀經に餘念がなかつた

347 漢代風俗二―山東省嘉祥縣武氏祠前石室第七石 (Chavannes, Mission archéologique, 104)

348 漢代風俗三―山東省發掘 (Chavannes, Mission arch., 162)

349 漢代風俗四 (洪适・隷續・第五卷)

漢の武帝の頃、忠臣張騫は二十餘年の歳月を費して中央亞細亞を横斷し、あらゆる困苦と鬪つて大月氏國に使し、西方の事情を詳しく支那に傳へた。これが東西文化交流の歴史的端緒になつたのである。かくて漢と西域との交渉は頻繁を重ね、葡萄、苜蓿(うまごやし)、胡瓜、胡桃、胡麻などの珍らしい果物や野菜が西域から漢土に移植されて、支那貴人の口腹を喜ばした。殊に名高いアラビヤ馬が二千頭も高い嘶きをあげて長安(時の帝都)に到着して武帝の厩に繋がれた。またギリシヤ美術の形式も輸入されたことは當然である。支那からは絹や紙(紙はその頃蔡倫といふ宦官が樹皮やボロを煮てそれを漉いてその原型をはじめて作つたのである)などが西方にもたらされたのである。
寫眞左と上圖は漢代の畫像石の拓本である。(山東省嘉祥縣武氏祠前後石室)當時の風俗がよく窺ばれると共に、美術なども西方美術の様式を盛んに取り入れたものと解される。
寫眞、丸型の右は百乳星雲鏡。左は方格四乳葉紋鏡。何れも前漢式鏡鑑。
寫眞は「東洋歴史參考圖譜」による。

北支の歴史

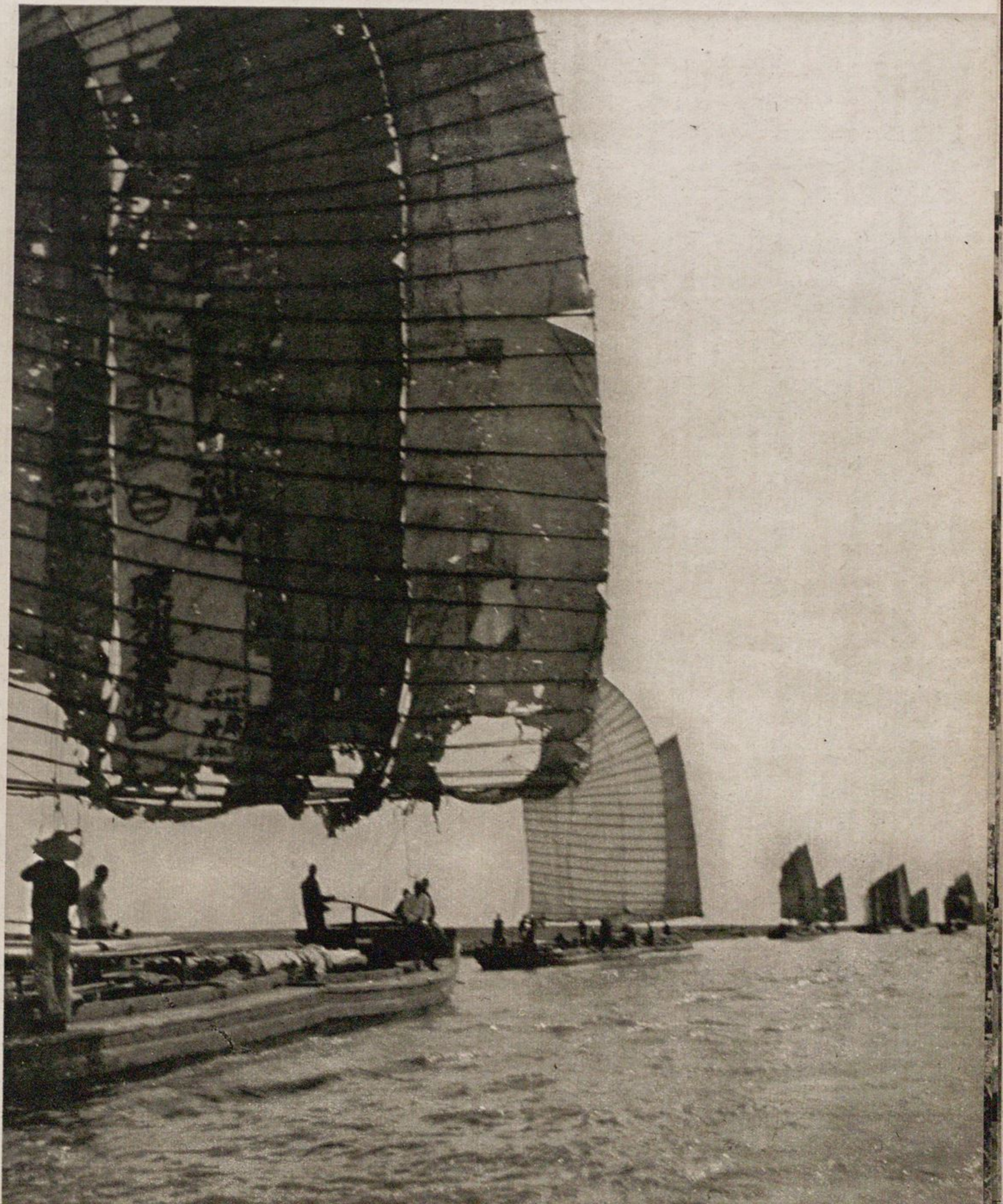
北魏・隋

日	大和時代	飛鳥時代
支	北魏	隋
西	三八〇年——六二〇年	

佛教が支那に傳來すると印度からその建築様式が傳つてきた。支那の石窟像で名高い大同の雲崗、洛陽の龍門、甘粛省の敦煌の千佛洞である。雲崗の石佛は北魏の文成帝が祖先の菩提を弔ひたい念願から開雕されたものである。

雲崗、龍門等の佛教藝術は朝鮮を經て我が國にも傳來した。法隆寺を中心とする飛鳥時代の藝術は間接には支那南北朝のものを、更に西域からガンダラ藝術の影響をうけたものである

隋の文帝は南朝の陳を滅ぼして遂に支那を統一することが出來た。かくて支那は東晋の末から南北朝に至るまで約三百年の紛亂と分裂を經て再び漢民族によつて統治されるに至つた

文帝の次ぎに立つた煬帝は制度を改善し法律を改訂して國民の利福を圖つたが、奢侈と女色を好み洛陽に顯仁宮を營み三千の美女と共に歌舞宴遊に耽溺したと云はれる

支那の運河は既に春秋時代から開鑿されてゐるが、隋、二代目の煬帝の築造が歴史上名高い。彼は運河によつて南北の物資を都に集めると共に、交通に大きな便宜をも與へた。先づ通濟渠を開いて黄河と淮水を結び、次いで刊溝を浚渫して淮水と揚子江を結んだ。更に永濟渠を開鑿して北京と黄河を連絡し、江南河を掘つて揚子江と杭州を結んだのである。然し彼はこれを政治上の目的に用ふるのみならず、自己の遊樂のためにも用ひたのであつて、兩岸には堤を築き、垂柳を植ゑ、四十餘の離宮を置き、此等の離宮へ巡幸した。さうしたことがやがては隋を滅亡させる原因となつてしまつたが、彼によつて初められた運河は勿論後世の改變を經てゐるとは云へ、今も猶殘り、支那交通史上に偉大なる貢獻をした事は否み難いであらう。寫眞は大運河の民船。

又煬帝は陸路の巡遊に飽き、水路によつて離宮から離宮へと舟遊を試みようと考へた。そこで、勿論經濟的な理由もあるのではあるが、通濟河を開いて黄河と淮水とを結び、また刊溝を浚渫して淮水と揚子江を結んだ。更に永濟渠を開鑿して北京と黄河とを連絡し江南河を掘つて揚子江と杭州とを結んだ兩岸には堤を築いて垂柳を植ゑ長安から江都（揚州）に至るまでには四十餘の離宮を置き煬帝は此等の離宮へ巡幸してゐた

しかしこの四十餘の宮殿も大運河の開鑿も皆、國民の苦役と血税の結晶であつた。君主一人の愉樂は億民の膏血であり時には蒼氓の枯骨であつた。國民は既に煬帝の豪奢と荒淫に顔を背向けて隋朝の短命を豫知した

煬帝はこのやうに快樂主義者であると同時に、一面は侵略主義者であつた。アルタイ山附近に勃興してゐたトルコ族に威壓を加へ安南、臺灣などを征伐した。しかし我が國に對しては高句麗の攻略に專念しながらも平和政策を維持した。聖德太子が小野妹子を派して「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや」と云ふ國書を呈されたのはこの時代である

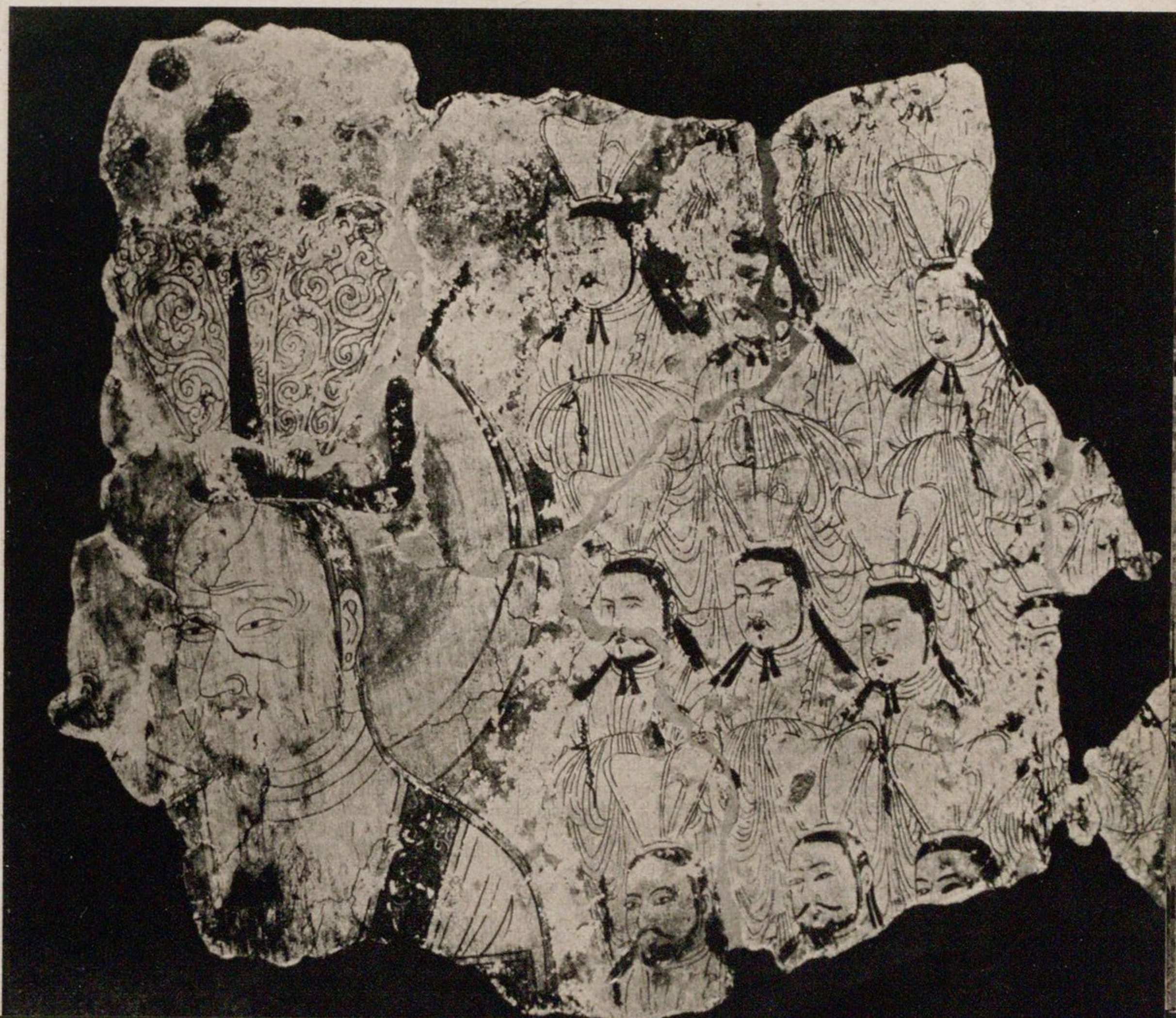
隋の煬帝は後、唐の高祖によつて滅ぼされた

漢の次に「三國志演義」などを通じて我々にも親しみ深い三國時代となる。これを統一したのが晋であるが、その時代になると支那の内部は弱體となり一面北方民族が盛に活動するやうになる。今の蒙疆地方に、拓跋族によつて北魏が起り、平城（大同）の地に都したのも實にこの頃のことである。爾來此の地は北魏の國都として榮え、大和十七年（西紀四九二年）に孝文帝が都を洛陽に遷すまで、此處を中心として北魏文化は獨自の發達を遂げたのである。その遺産として、佛教藝術の至寶と稱せられる雲崗石佛がある。結構壯大華麗なること只驚嘆するばかりである。もつて北魏の勢力と文化が如何に揮つたかを窺ふことができる。寫眞は大露佛。

唐

日	支	西
飛鳥時代　奈良時代　平安時代	唐	六三〇年――九一〇年

新疆省和闐縣干闐古址のダンダーンウイリク祠堂の欄間に見出される唐代の板畫（東洋歴史參考圖譜より）

唐三彩、鷄頭壺

唐代摩尼教寺院壁畫の斷片、新疆省高昌故址發見（東洋歴史參考圖譜より）

高祖の次ぎに帝位に上つた太宗は英邁果斷の君主であつた。卽ち堅く驕奢を戒めて倹素の範を垂れ、更に儒學と文學を奬勵し國民の德化に努めた。同時に制令を寛定し租税を輕減して民力の休養に意を用ひたので國家はよく治まり萬民は生業を樂しむことが出來た。當時は貞觀といふ年號であつたから太宗の善政は「貞觀の治」といはれてゐる。又太宗によつて定められた諸制度は支那歴朝の範となつたばかりでなく我國や朝鮮にも大きな影響を與へ、我が大化の新政、並びにそれを法制の上に具體的に現した大寶律令の如きも皆唐の制度が參考とせられてゐる

太宗の崩後、則天武后や韋后などの專横暴逆の限りを盡した皇后が出て一時唐は衰微の兆を示したが玄宗が皇帝に卽くや、租税を輕くし、刑罰を愼むなど大いに善政に心掛けたので天下はよく治まつた。又全國を十五道に分け、旣に有名無實になつてゐた府兵制度を廢して募兵制度に改め國防の要地には節度使を置いて夷狄や盜賊に備へた。しかし玄宗皇帝は晩年に近づくに從つて全くこの資格を失つてしまひ、驕奢に耽り、殊に酒色に淫して在來の王者が示したと同じ徑路を辿つて國家を騷亂に導き自己一身の破滅を來たした。卽ち楊貴妃への寵愛であり、安祿山の亂である

安祿山の亂後玄宗は肅宗に位を讓つたが、以來國内の統一を缺き宣宗のやうな英主も現れたが唐は遂に哀帝を最後として二十代二百九十年で滅んだ。時に醍醐天皇の延喜七年であつた

唐は二十代二百九十年で滅んだが、支那四千年を通じて中國文化がその極盛期に達した時期であり、取分け玄宗の治世は唐文化の爛熟した時代である。詩では李白、杜甫の二大巨星を始め多くの詩星が現れ、畫家では有名な王維、李思訓など、書家では顔眞卿などが輩出した。又憲宗を中心とした時代には韓愈、柳宗元などの文豪、白樂天のやうな詩人が現れ文化の上での一時代を築き上げたのである

又唐代には宗教が弘く行はれ、道教、佛教、摩尼教、祆教、景教、回教などが傳へられた。中でも佛教は最も盛んで名僧もまた多く現れた。その中でも太宗時代の玄奘と高宗時代の義淨とは特に有名である

日本と唐との修交は舒明天皇の遣唐使派遣によつて開始された。かくて宇多天皇が遣唐使を廢止されるまで、遣唐使の派遣は十四回に及んでゐる

かくて我國の文物制度上に唐代の文化は深甚な影響を及ぼした。前述の如く大化の改新も、大寶律令も、唐制を參酌して根幹を攝收したものであり、天台、眞言の二宗を齎した最澄、空海の二僧も當時の留學生であつた。又、當時の我が建築、彫刻、繪畫の上に唐代の佛教藝術が絶大な影響を及ぼしてゐるのである

唐代の樂器（これは我が正倉院の御物である、東洋歴史參考圖譜より）

遼代建立、天寧寺佛塔

北支の歴史

遼と宋

1

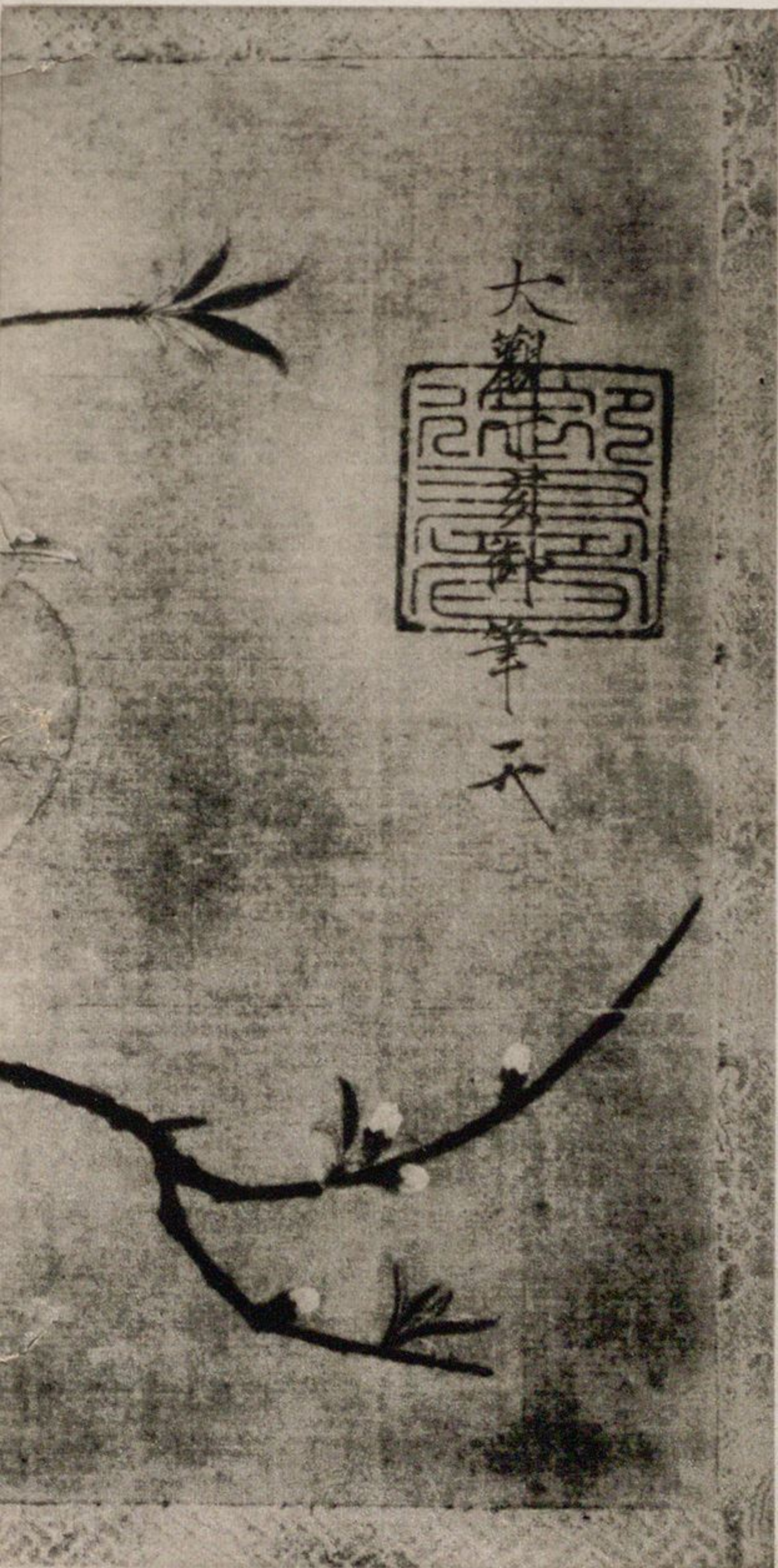
日	平安時代	院政	鎌倉時代
支	遼		
	北宋		
			南宋
西	九二〇年	——	一二八〇年

もと唐の將軍であつた朱全忠が哀帝を廢して、汴京に都し後梁の太祖となつてから支那は再び騷亂時代にはいり、宋の天下統一まで後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五王朝が興つたり滅びたりした。又支那本部が宋によつて統一されると同時に蒙古、滿洲、渤海の三國を新版圖とした遼が興起して宋と對立するのである。當時遼の領土は東は日本海から西は天山山系に及び、南は支那北部、即ち河北、山西地方に跨り北は外蒙古に至る廣大な範圍に亙り絶えず宋に對して壓迫を加へた。かくて

宋は遼、遼の次に金、金の次には蒙古と絶えざる北よりの侵略を蒙り遂に元のために滅ぼされるのである

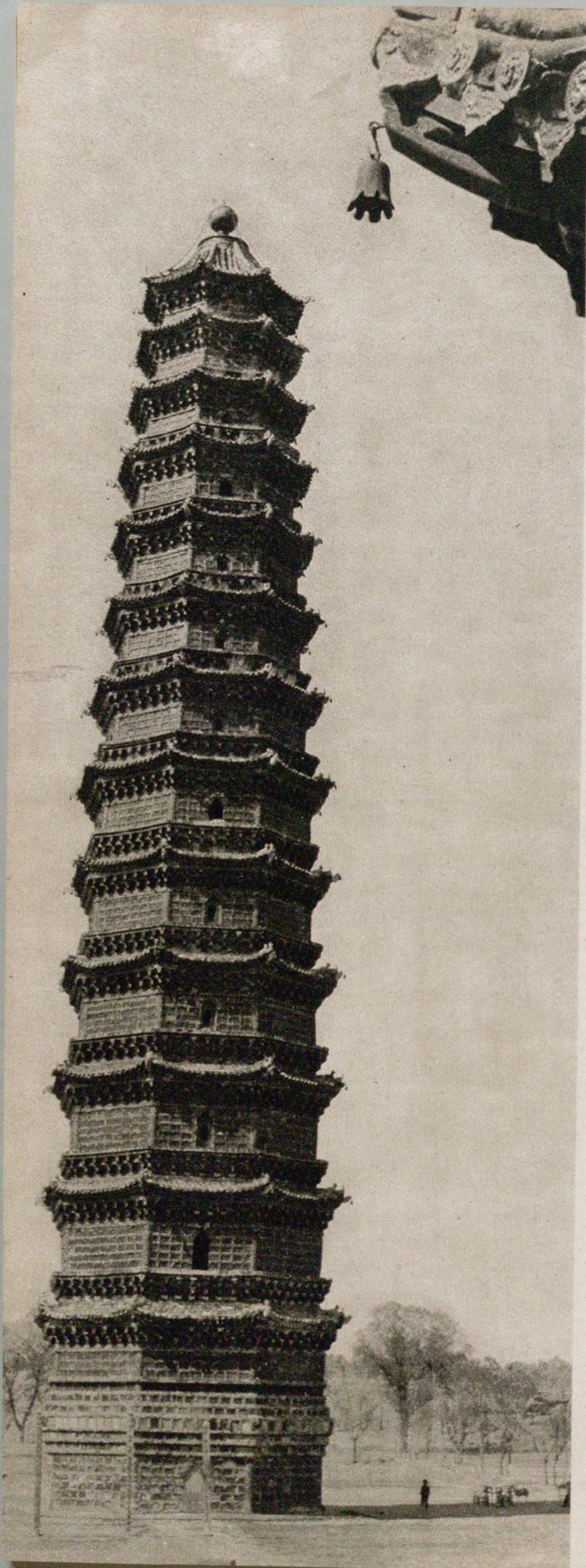
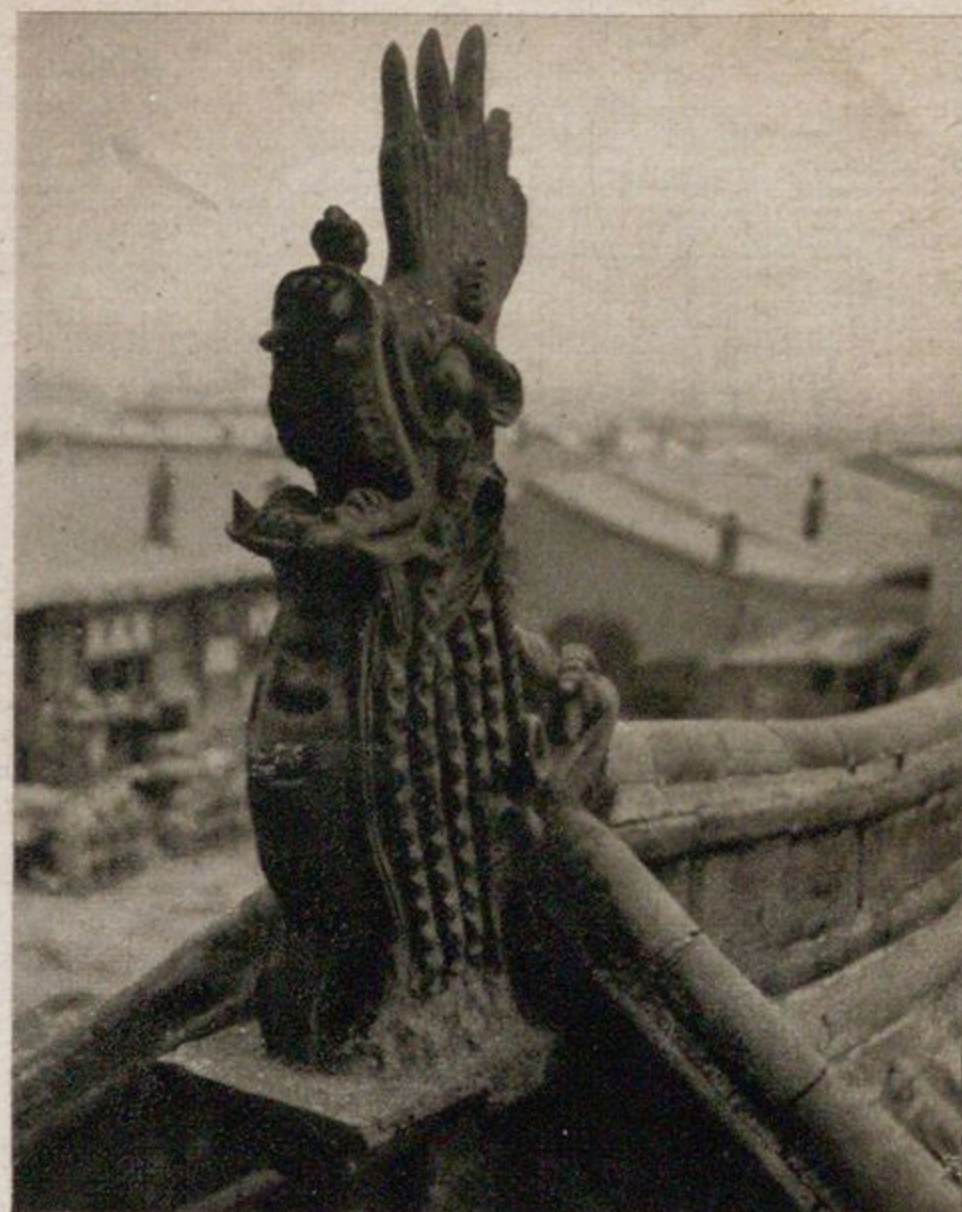
宋の盛時は宋代第一の名君として漢の文帝と並び稱せられた仁宗の代で、慶曆の治として支那史上でもつとも泰平な時代の一つとされてゐる

唐代は世族政治すなはち貴族政治の中心であつたが、宋代には政府が民間の逸材を簡拔して官吏に任じ政治の要衝に當らせたので社會の空氣が一新され學問や藝術が漸次貴族的な都會風を脱して民衆的になつた時代である。儒家には周敦頤、程顥、程頤、朱熹などが出て新學風を稱へた。又唐代は詩の全盛期であつたが、宋代の文學の中心は

宋朝は國初から藝術を重んじ、就中徽宗皇帝は自ら染筆して山水花鳥を描いた、よつて支那歴史を通じての美術の極盛時代が出現した。此の繪は徽宗筆、桃花嬉鵲圖（東洋歴史參考圖譜より）

詩から散文に移動する傾向を示してゐる。散文家には歐陽修、蘇洵、蘇軾、王安石、黄庭堅等があり、中でも歐陽修、蘇軾は詩人としても名高い。又歴史家には「資治通鑑」の作者である司馬光がある。美術工藝についても、宋朝は國初から藝術を尊び名家に優待を加へたから、著しい發達を遂げた。畫家には李思訓の畫風を受けた李成と范寛、王維の衣鉢をついだ董源と巨然、花鳥山水に巧みであつた米芾とその子の友仁、その他夏珪、馬遠、梁楷や人物畫、佛畫の名手であつた李龍眠が出た。書家には蔡襄、蘇軾、米芾、黄庭堅がある

宋代建立、開封鐵塔

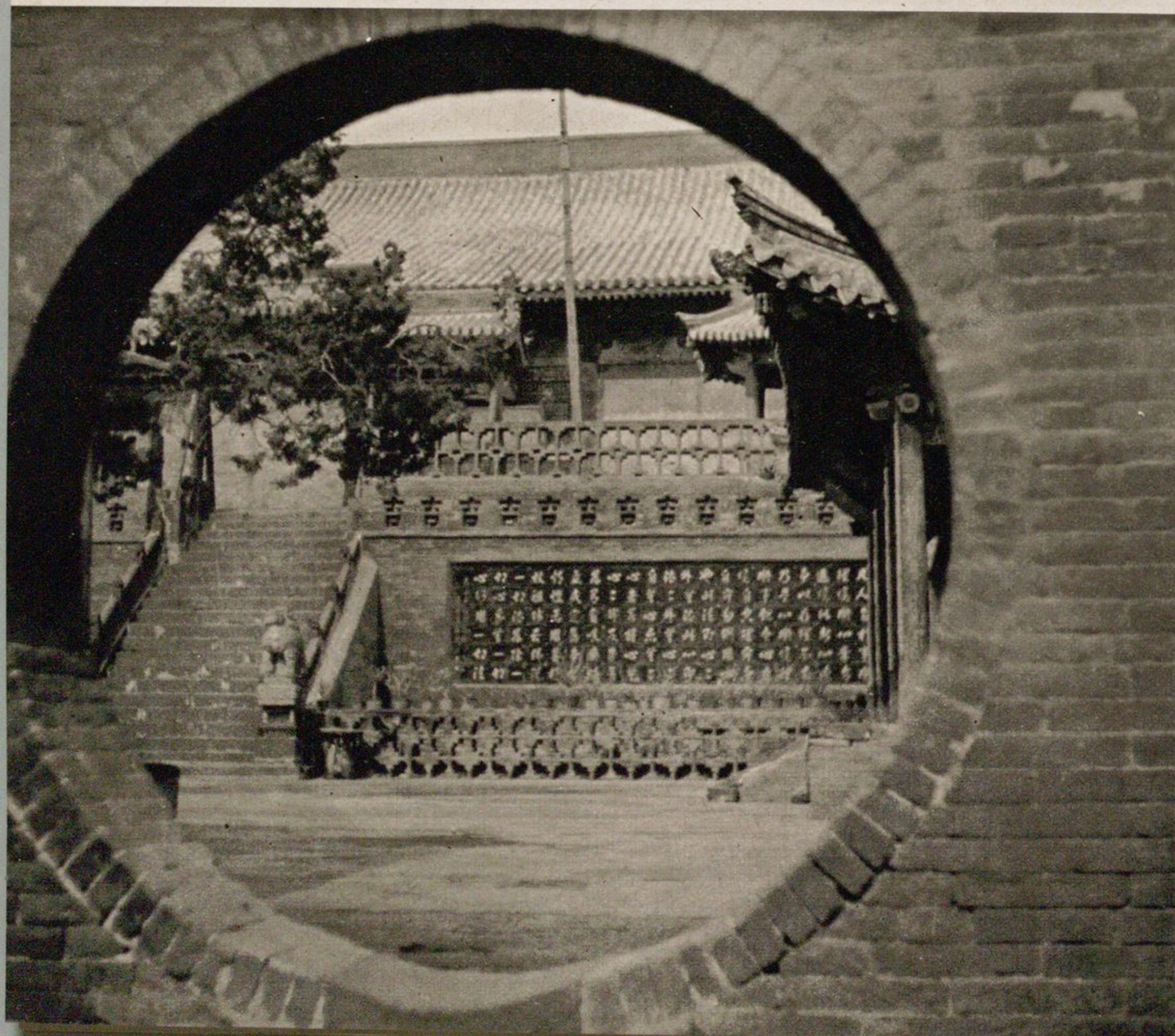
龍頭

北支の歴史

宋と遼 2

佛像

本尊蓮座の一部

又宋代には陶器、磁器、漆器の製法が發達した。仁宗の時代に畢昇といふ無位無官の人物が膠で粘土を固めて活字を作り、活字版を發明してゐる。この活字版はドイツ人、グーテンベルヒの金屬活字の發明に先き立つこと四百年で、世界最初の活版印刷といふことが出來る

拓本とり

大同は北方民族が北支那に勢力を揮つた時代には何時も榮えた。北魏以後、遼、金には陪都西京として前後二百餘年も殷盛を極めた。

今日殘る上下華嚴寺は城内の西南隅に在り、もと一つの寺であつたが後別れて二寺になつたのである。約九百餘年以前卽ち遼の淸寧八年に建立された。

此等の寺院は勿論往年の盛況はないがなほ當時の建築や佛像を傳へて居て、今日訪ふ者をして其の時代の文化を偲ばしめる。

北支の歷史

金から元へ

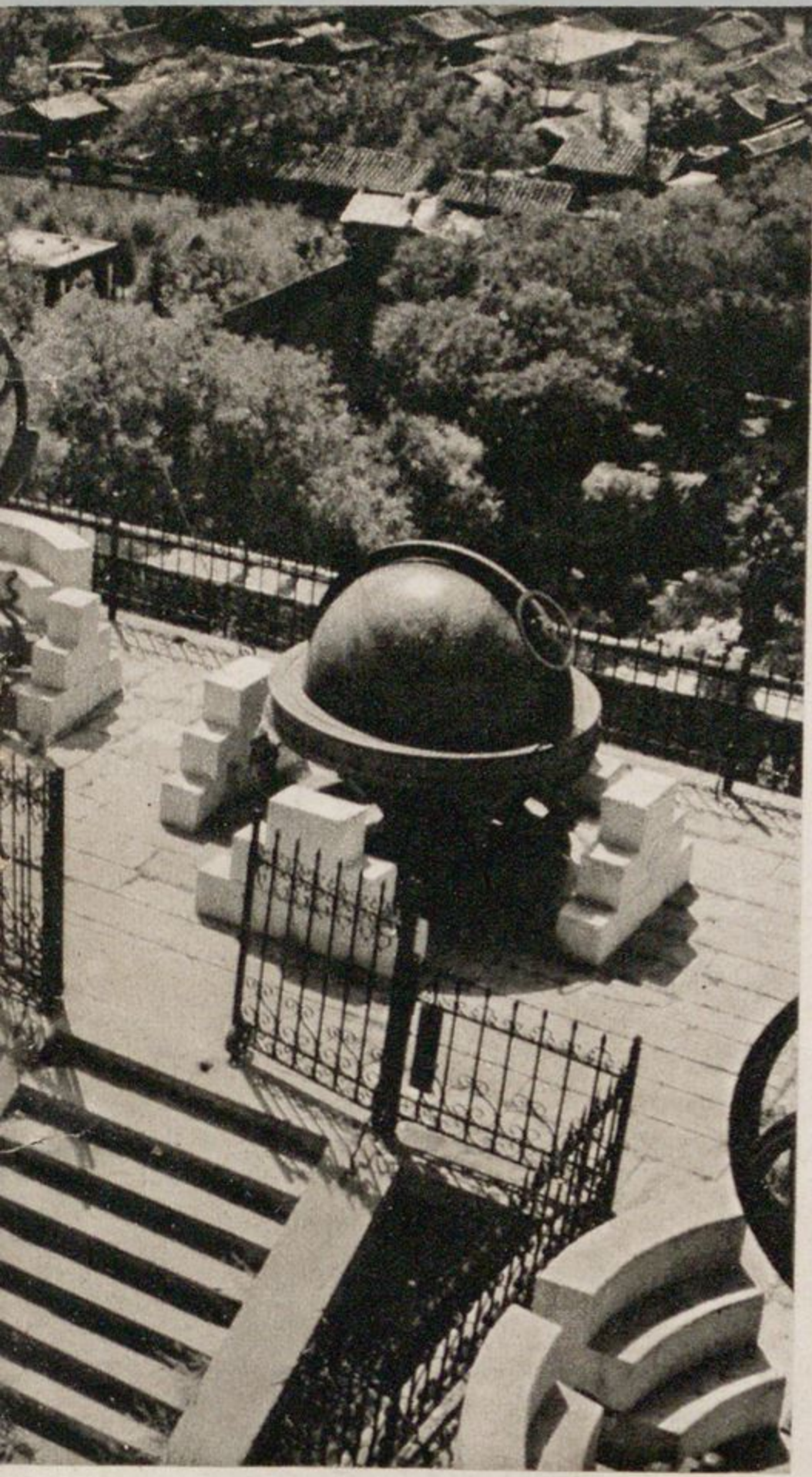
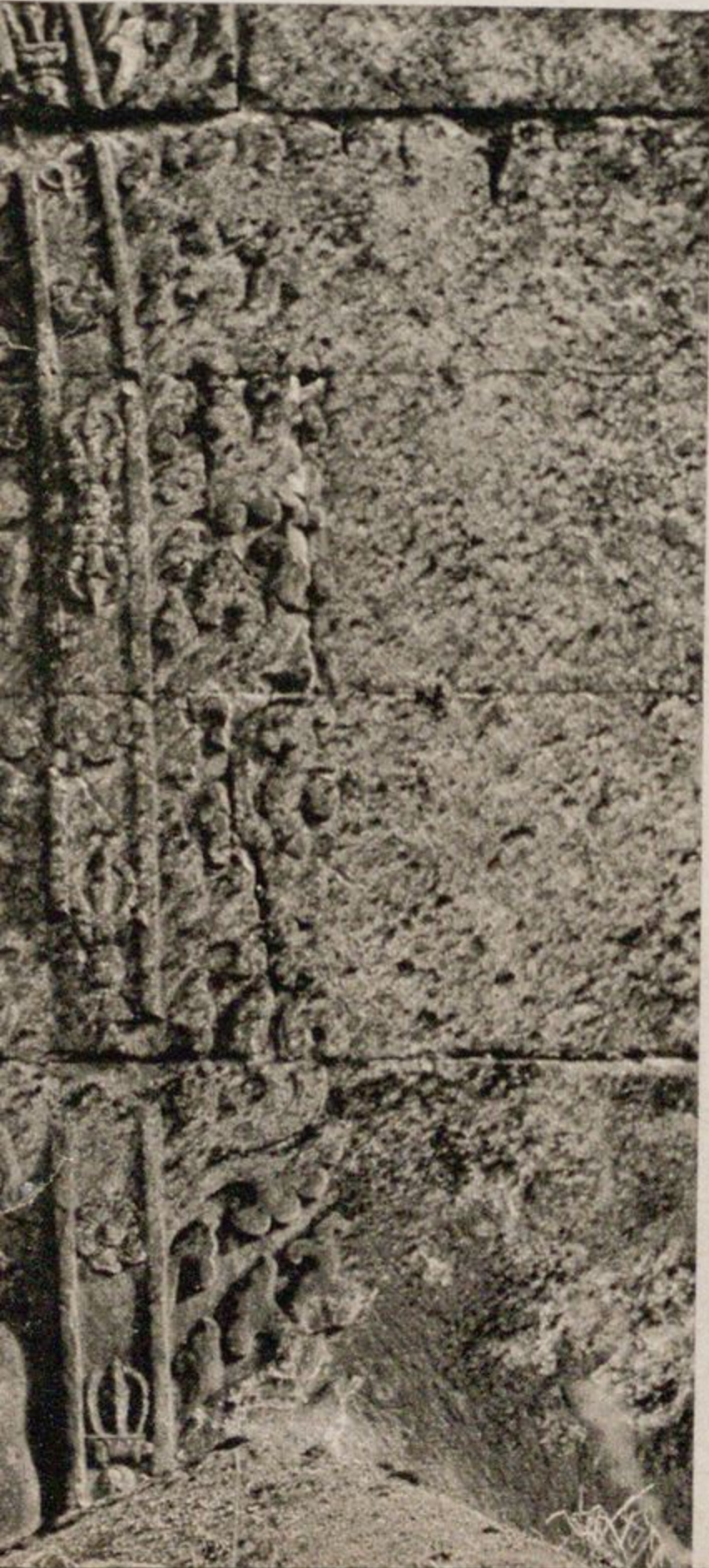
日	院政	鎌倉時代	吉野時代
支	金	元	
	南宋		
西	一一二〇年	———	一三七〇年

金は上古には粛愼、隋唐の頃には靺鞨五代には女眞と稱した國で、その地は黑龍江の上流地方にあり今の滿洲國の中部以東から沿海州の一部に及び西方は契丹に接してゐた。始めは渤海につ いてゐたが渤海が契丹に滅されてからは契丹につき契丹が遼となるとまたこれに從つたが、遼の政が亂れ衰へると之に乘じて叛き遼軍を破つて吉林省の會寧に都して國を大金と號した。その後、金はしばしば宋を侵略しその首都開封を陷れ宋をして南渡せしめたが、新たに起つた元のために建國後百二十年にして滅んだ

蒙古族は黑龍江上流オノン、ケルレン兩河の水源地方に蟠踞してゐた遊牧民であり、上古から東胡、匈奴、柔然など樣々に呼ばれてゐた。この民族は極めて野蠻だつただけに性質が驍勇で獨自の戰法を有し、殊に騎射に長じてゐた。しかし長い間遼と金とに隷屬してゐたが宋と金との國力が衰退した時成吉思汗が現れ内外兩蒙古を統一した。成吉思汗の子太宗は金を滅ぼし朝鮮の諸道を蹂躪すると共に、甥の拔都を大將としヨーロツパに侵擊せしめた。この遠征軍は今のモスコー、キエフを陷れ、更に進んでドイツ諸侯の同盟軍を

元代アラビヤ人によつて此の地で氣象

元土城址、北京北郊

觀測が行はれた、北京内城東南にあり

西紀一二四一年（四條天皇、仁治四年）ワールスタットに撃破し、大いに全ヨーロッパを震駭させた

更に太宗、憲宗を經て忽必烈の時になると宋を滅ぼし今の北京に遷都して國號を元となした。當時、元の領土は空前のもので直轄地としては支那本部と滿洲及び蒙古の大部、屬國としては高麗、西藏、印度支那諸國、南海諸國及び中央アジア、天山北路地方を領土とする察合汗國、西部蒙古及びアルタイ地方を領土とする窩濶台汗國、西アジヤ及び東ヨーロッパの一部を領土とする欽察汗國、西アジア一帶を領土とする伊兒汗國であつた。ただ西ヨーロッパとエジプト、印度、日本だけが元の版圖から脫してゐた

蒙古軍一萬五千、高麗軍八千、水手六千七百、戰艦九百餘艘を率ゐて日本を襲つた文永の役、又元軍、高麗軍合せて兵八萬、水手二萬、戰艦九百艘を以つて再度襲つた弘安の役、共に忽必烈の代で二度とも日本軍の勇武と颶風のために全滅した。忽必烈は、この現象に神靈の活動を認め、日本國を「不征國」として長く侵寇の意志をなげうつたのである

居庸關の雲臺と彫刻
元が殘した世界に誇るに足る唯一の藝術品

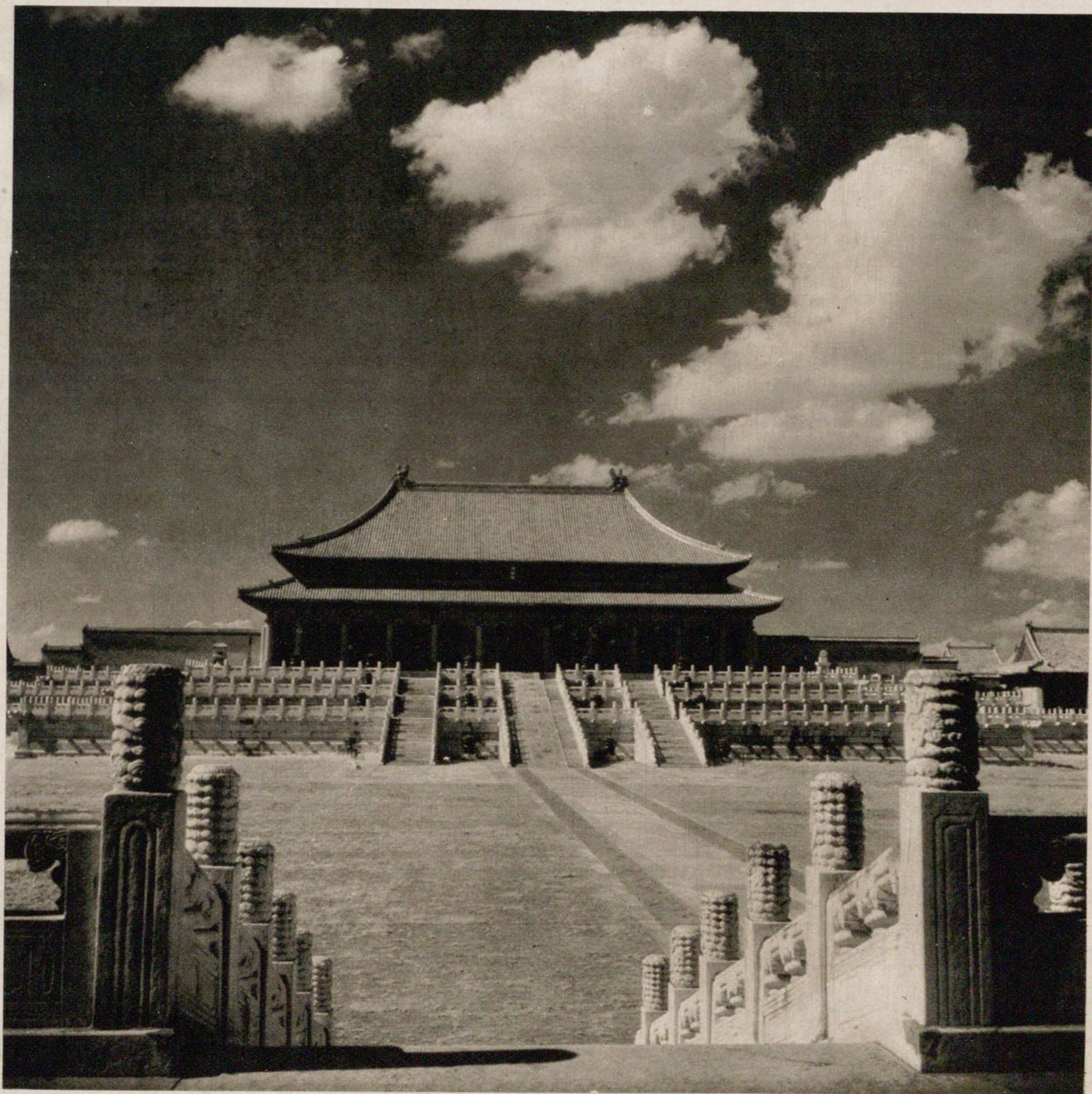
蒙古は東亞から西亞に亘る大帝國を建設し、漢族に君臨して百年もの間天下を支配したが、一體何をのこしたのだらうか。東西交通に對する寄與だとかアラビヤの學問の輸入だとか、數ふればないことはないが、今日殘存して我我の目に觸れるものは、その覇業の偉大なのに比較して、足跡の貧弱なのに物足りなさを感ずるのである。

明

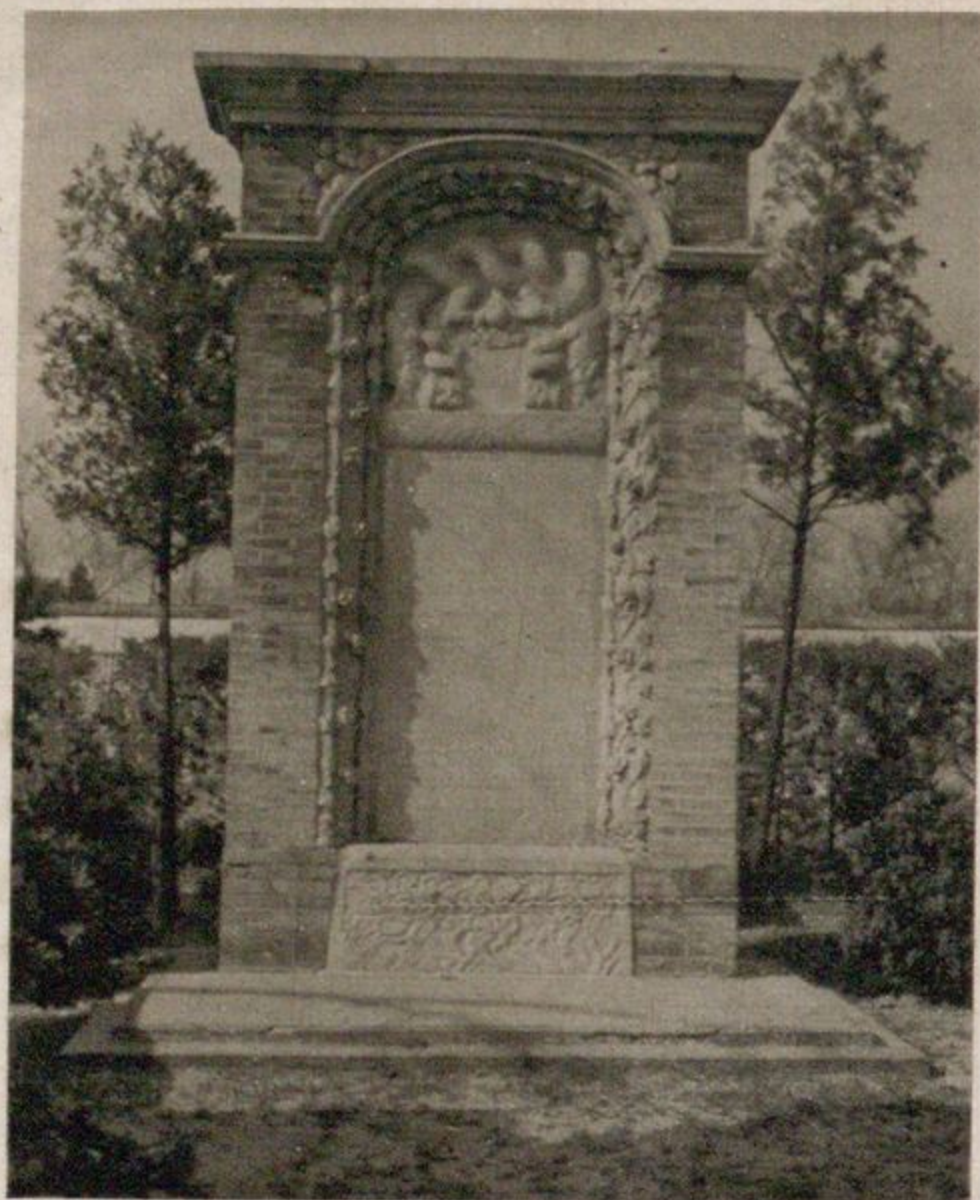
日	吉野	室町	戰國	江戸
支	明			
西	一三七〇年——一六四四年			

支那文明、支那民族の全盛期が漢唐に極まつて、それから以後は漸落の時代の様に考へられるのが普通であるが、それは誤りである。この發展は實に近世程著しいのであつて、殊に明代は漢民族が最も國粹的特徴を發揮した時代であつた

第一代の洪武帝は文字通りの乞丐僧侶から身を起して、蒙古を逐ひ、遂に中原に君臨した。その境遇は漢の高祖に似てゐるけれど、劉邦が無學であつたのに比較すると、朱元璋は兵馬の間に於いて何時しか博學能文の明主となつた。彼は武を用ひては東北方面のみならず、西南方面にまで國威をのばすと共に、文を用ひては官制を改革し、兵制を更新し、民政に意を注いで、驚く可き文化の興隆を招いたのである

明は初め南京に都したが、第三代永樂帝に至つて北京に移つた。今日の北京の如きも明代に出來上つたもので、清

北京紫禁城大和殿

朝になつてからも同様ここに都してゐるが、尠くとも外形の上では變つてゐない。明一代はあらゆる方面に於いて如何にも沈滞してゐるかの如く見られる。然しさうした考へは正しくない。これを建築や工藝に例をとつてみるに北京の宮殿、昌平の十三陵、或は萬暦の陶瓷、景泰の七寶等に於いて、優秀比類なき技術を發揮してゐることからも推測されよう

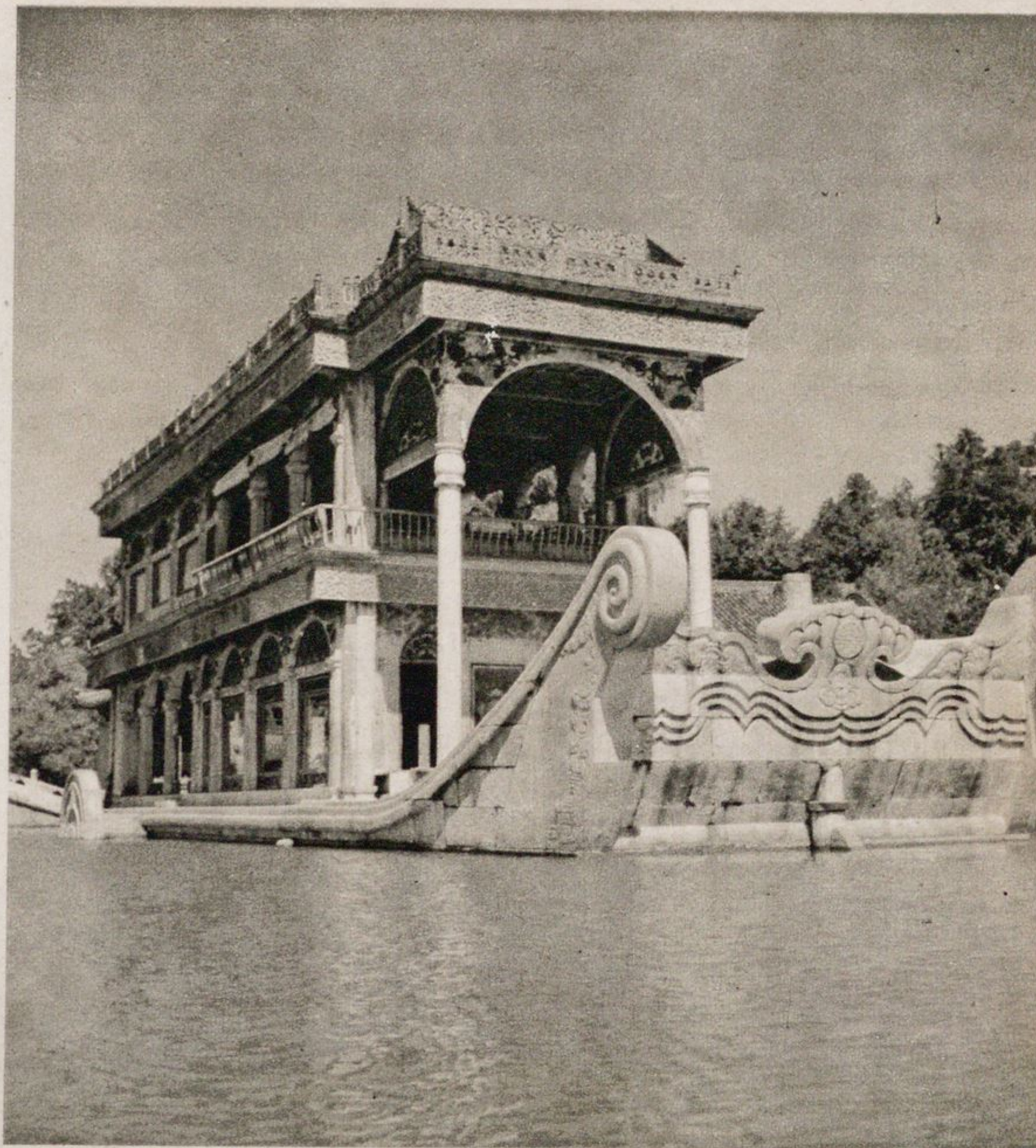
明の文化は世界的國際的ではない。云ひ換へるならばより支那的であり、國粋的である。これが外面的には如何にもはでやかでない理由である。勿論、末期になると西歐人の渡來があつて外國文明の輸入なども初まつてゐるが、それは殘念乍ら未だ開花するには至らなかつた

伊太利人傳道師マテオリツチの墓、彼によつて西洋文明が輸入された

天壇・祈年殿

北支の歴史

清

日	江戸時代	現代
支	清	現代
西	一六一六年——一九一二年	

萬壽山の石舫、清朝三百年の歴史を華やかに彩つた女丈夫西太后が、その晩年を豪奢と享樂との間に過した遺跡、北京西郊

清初にヴェルサイユ宮殿を模した大離宮、圓明園の廢墟、西紀一八六〇年、英佛聯合軍によつて破壞された

悠久三千年の支那の歴史をひもといて見ると、その限りなき幕の變り目にも拘らず、舞臺は要するに支那的世界であつて、此處にをどる役者は漢民族とそれをめぐる夷狄、主として長城外邊の北族であつた

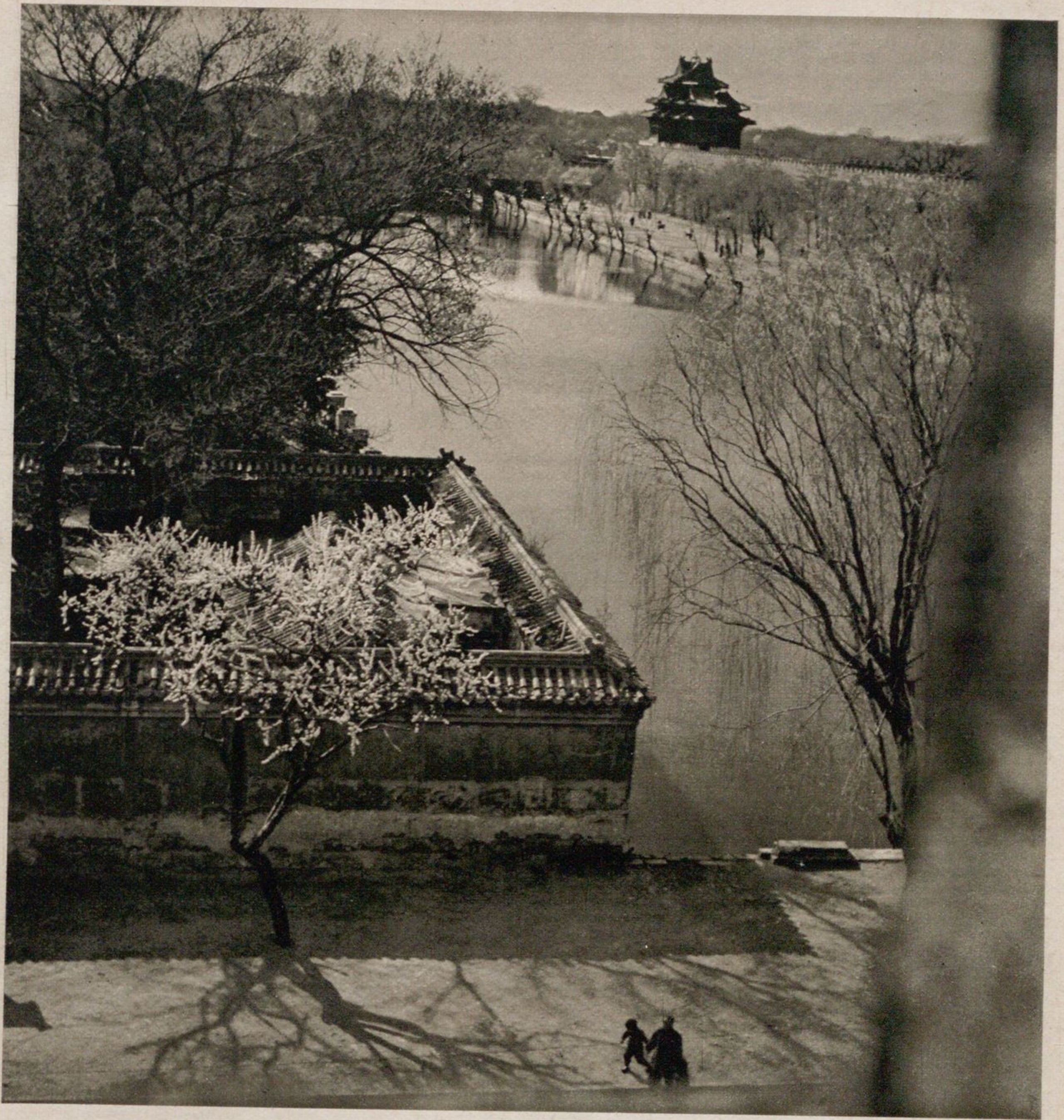
漢族は早くから農耕生活に入つたが、北族は遊牧狩獵の状態を長く脱し得なかつた。前者は持てる國であり、後者

清朝は乾隆帝の治世を絶頂として、その後は内亂と外寇によつて國勢は轉落の一途をたどつた。漢族は清朝をくつがへし、現代に至つたが屈辱的な外國權益は依然として殘つてゐた。舊臘八日米英に向つて起ち上つた日本軍の手によつて伊・佛の權益を除いて、その全部が回收せられたことは、周知の通りである。

は持たざる民族である。兩者の均衡が破れたとき、新しい歴史の舞臺が初められる

滿洲族が興京から遼陽、奉天、果ては北京とめまぐるしい勃興を示し、支那四百餘州を平定して華かに舞臺をにぎはしたのも、結局脚本そのものには變りがない。あの辮髮などを長く垂下げてゐるところを見ただけでは變つてゐる樣にも考へられるかも知れぬ。然し言葉も食事も住居も皆支那式であつて、君主は相變らず、天を祀り、地を祭り、孔子樣の敎へを人民に向つて示したのである

支那が世界であつた間はいかめしい紫禁城の中にゐて、德治主義の御題目をとなへてさへゐれば、實はそれで兎に角やつて行けたのであつた。清朝はかうした意味での最後の帝國であつたのである

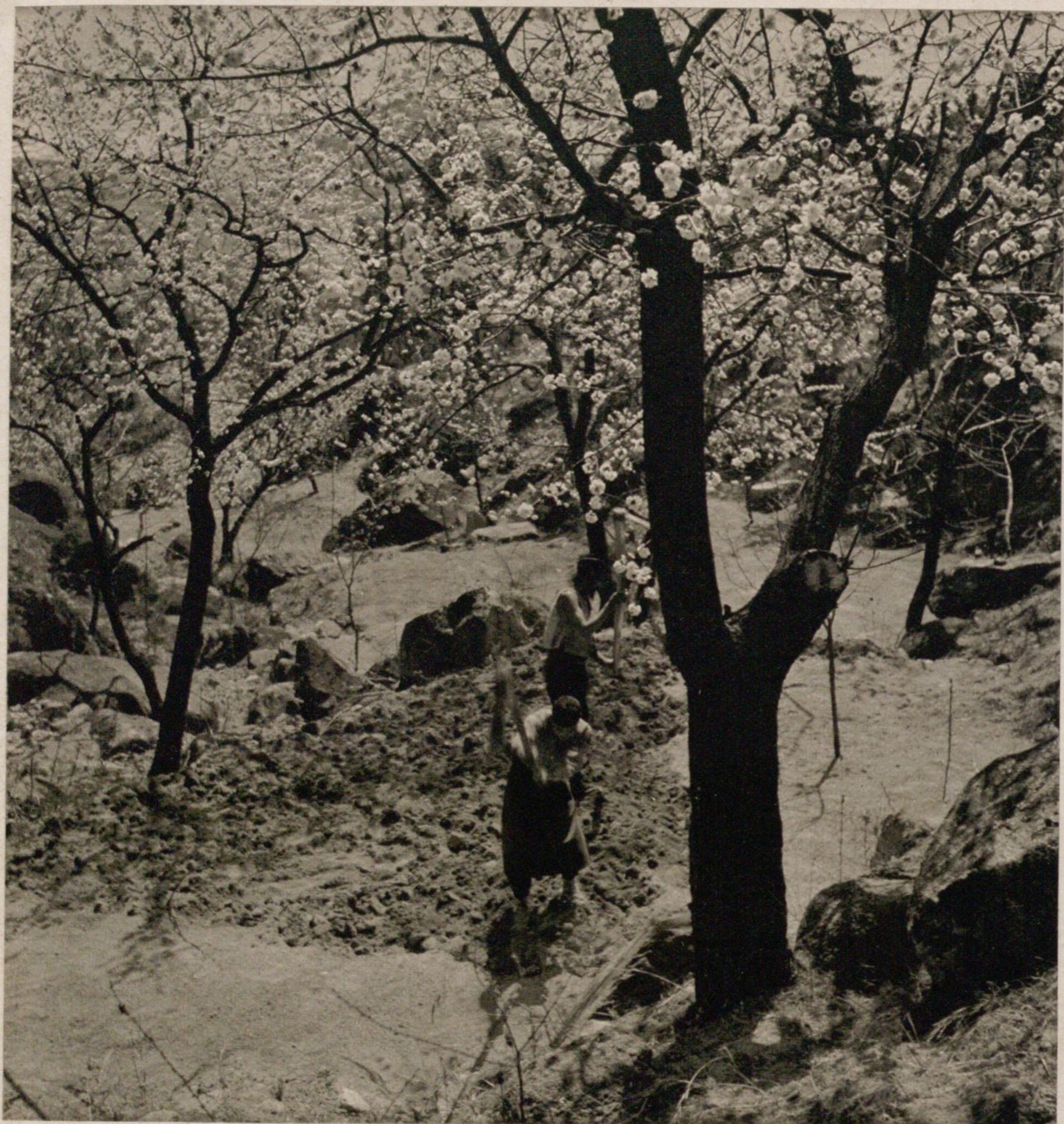
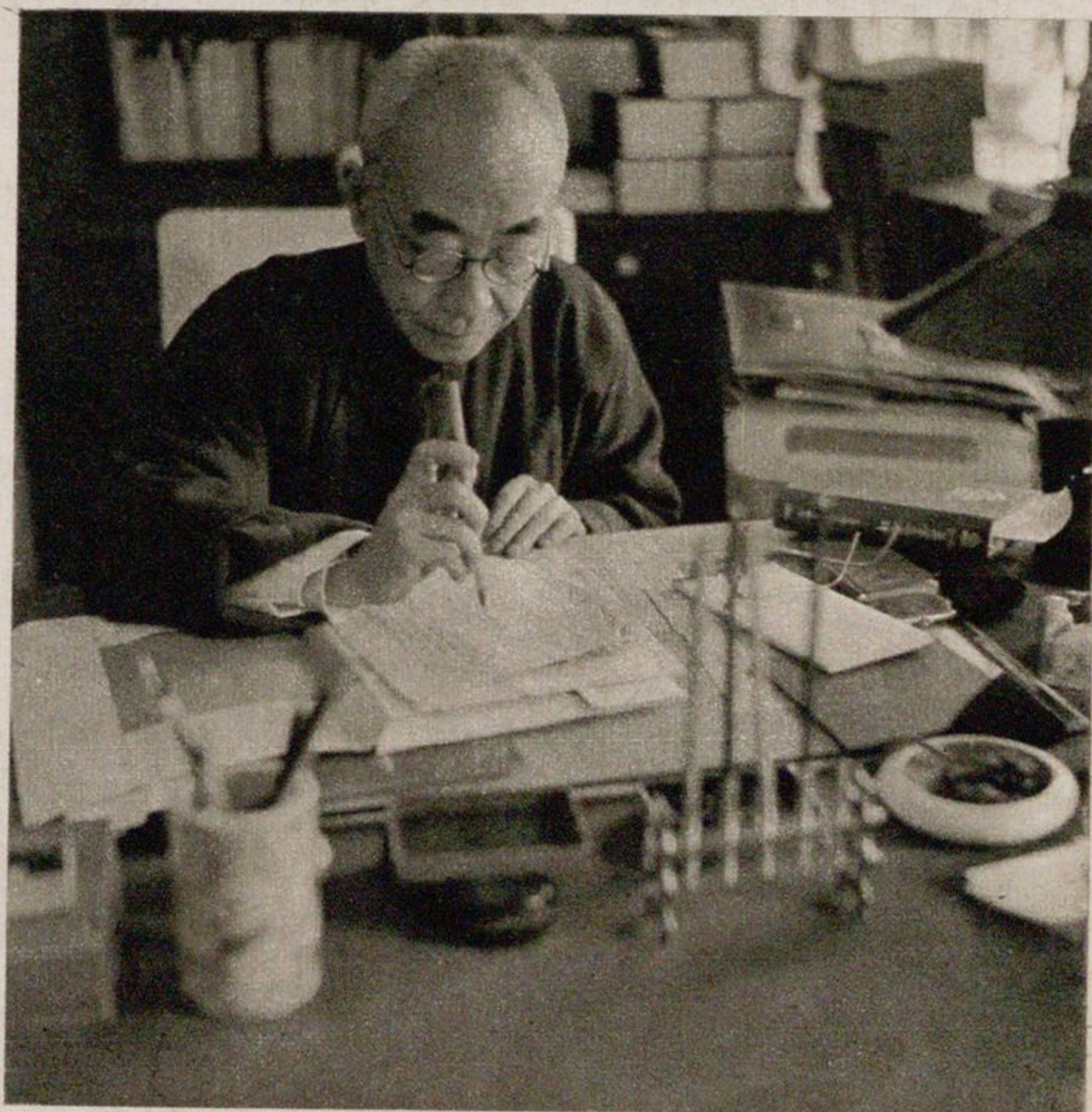
阿片戰爭以來、この舞臺はもう舊くさくなつて使ひものにならなくなり初めた。そこには異つた役者が來て加はることになつたからである。舊派の役者達は新來のものを一座することには不贊成で、出來るなら昔のまま行き度いと思つた。だが、もうそれは出來なくなつてしまつたのである。何故ならさうした舊い舞臺裝置ではもう使ひものにならなかつたからである。清朝の滅亡と滿洲族の沒落のみを意味するのではない。實に德治主義的世界觀卽ち天下國家が解消されて、支那が新らしく世界の一部となり、世界の潮流に合したことを意味するのである

北京紫禁城の濠

城東早春

詩家の清景は新春に在り
柳嫩にして鶯黄色未だ匂はず
若し上林の花錦に似るを待たば
門を出づるは皆是れ花を看るの人
（唐の楊景山）

動中に靜あるべく忙中閑を偸んで彩管をとるならば北京の春は陶として靜かである。市井の塵は拂はずとも心の水を濁してはなるまい。知らず杏花の有情なるや無情なるや

京山線昌黎にて

醫學院豫科教室

周作人氏と共に北支の誇る文學者錢稻村氏、萬葉集中國譯で著名

文學院前にて

北京大學 1

北京大學の歷史は古く、今を遡る四十數年前の光緒二十四年五月より始まる當初京師大學堂と稱せられ、その後幾多の變遷を經て今日に至つたものである。中國の背負つた數々の內外に於ける政治的苦難の過程は、この大學に多難な道を辿らせはしたが、已に萬餘にのぼる多數の人材を世に送つてゐる。そして事變前、中國を襲つた澎湃たる排日の風潮に禍ひされ、戰ひの始まると共に、この大學の總ゆる舊きものは中國の奧地に忙しく流れ去つた。それから臨時政府の成立があり、今は亡き教育部總長湯爾和氏を校長として、再びこの大學の新生が始められた。現在は瞿益鍇氏を代理校長として、總監督處の下に、文理農工醫の五學院が統轄されてゐる。日本人學生の入學が許可され、日本人教授を招聘してゐるところに、その組織內容が察知されるが如く、日支文化の流れが、ここでは日每交はりつゝあるのである

北京大學

2

醫學院教室にて

特に醫學院には附屬病院の開設あり、一般民衆との接觸もあつて、日本醫學の注入は、新生中國にとつては好箇の内助となりつゝある。そして、近くは法學院も開設の運びになるといふ。とまれ、ここには將來の日華兩國を荷負ふ若き日華の學徒達が、日々研鑽にいそしんでゐる。東亞文化の絢爛たる開花を近き將來に夢見つつ

附屬病院に於ける臨床

番臺

支那風呂屋の玄關

支那風呂

支那風呂では支那人はただ垢を洗ひおとすことより友達と閑談したり商談したり又本をよんだり休息したりすることを主な目的とするので半日がかりで風呂に入る。ビールをのみ飯をくひ、うとうと眠りながら、あんまをやらせ脚の爪をきらせ足もみをさせ散髪させるので時間がかかるわけである

その内容設備から言へば世界に誇つて良い特異の存在である

風呂屋（澡堂）は

一、日本の錢湯の様に混合式のもの（池塘）

一、バスばかりの高級風呂（官堂）に別れる。大體北京の有名な風呂屋はこの二つを兼ねてゐる。場末に行けば池塘だけの物が多い

高級な風呂屋には理髪屋もある

池塘は寫眞のやうに白タイル張りの小さな桝にわかれ一つ一つお湯の溫度が違つてゐる。風呂からあがれば大きな部屋にカフェのボックス然としたソファが數十並び、そこでゆつくり湯上りの身體を休めるのである。官堂は大體二部屋に別れ一部屋にはソファが二つ奥の部屋にはバスがある

事變以來一番支那の商人でまうかつたのは風呂屋だらうと云ふ事である。風呂好きな日本人がせかせかときてせかせかと歸りお客の新陳代謝がはげしいからである。女人禁制の風呂屋にバス（官堂）を家族風呂と思つて女房子供を連れて强引にはひつてくる日本人には支那人はびつくりしてゐる

足もみ

井戸の水くみ

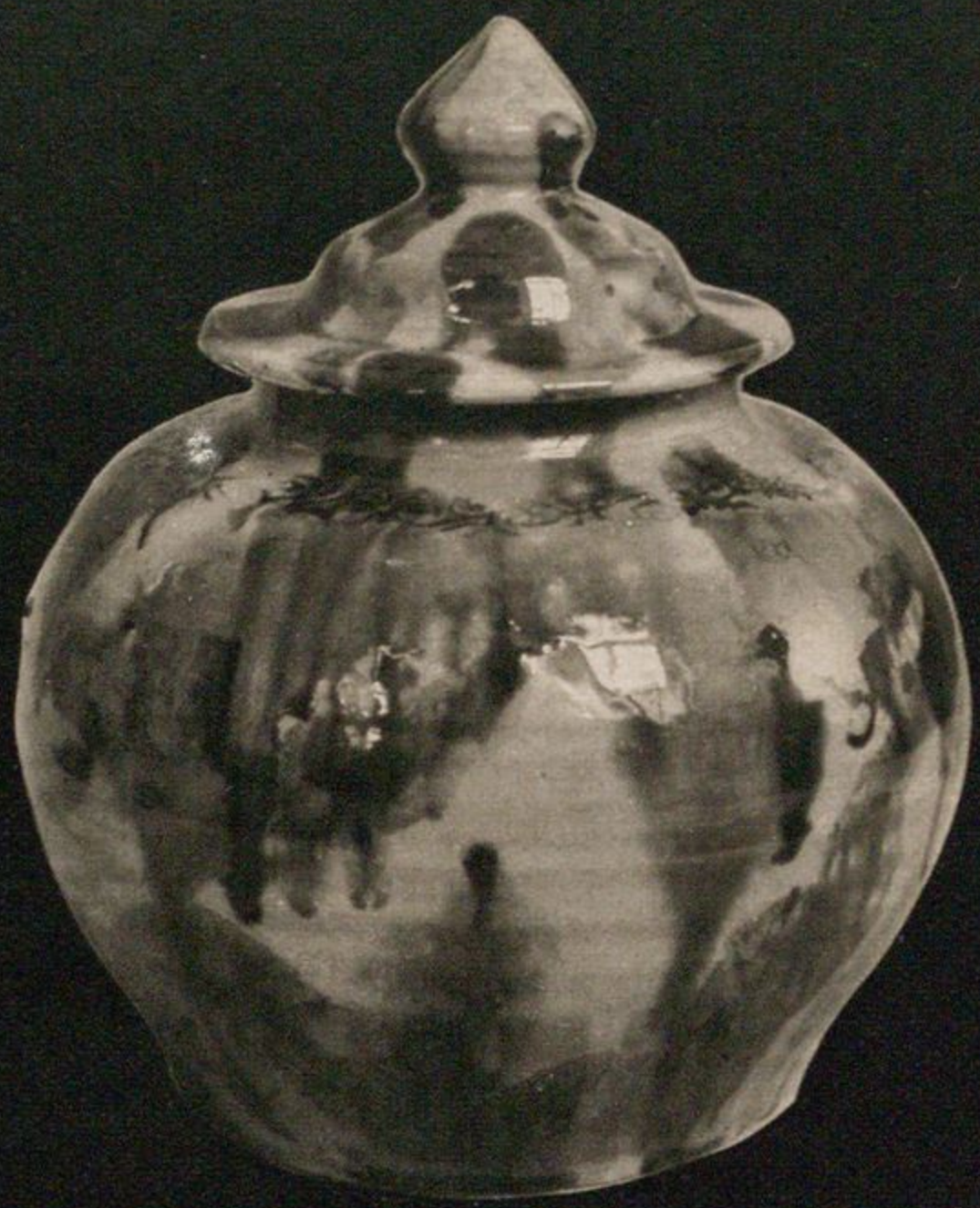
座席

この浴漕は一つ一つお湯の温度が違つてゐる

一

三

二

四

今も燒く北支の民窯

吉田璋也

北支の民窯で今も燒く物の內で、吾々大陸に住む日本人が、その生活用具として取り入れて、吾々の心の糧ともなる物を、拾ひ上げて見よう

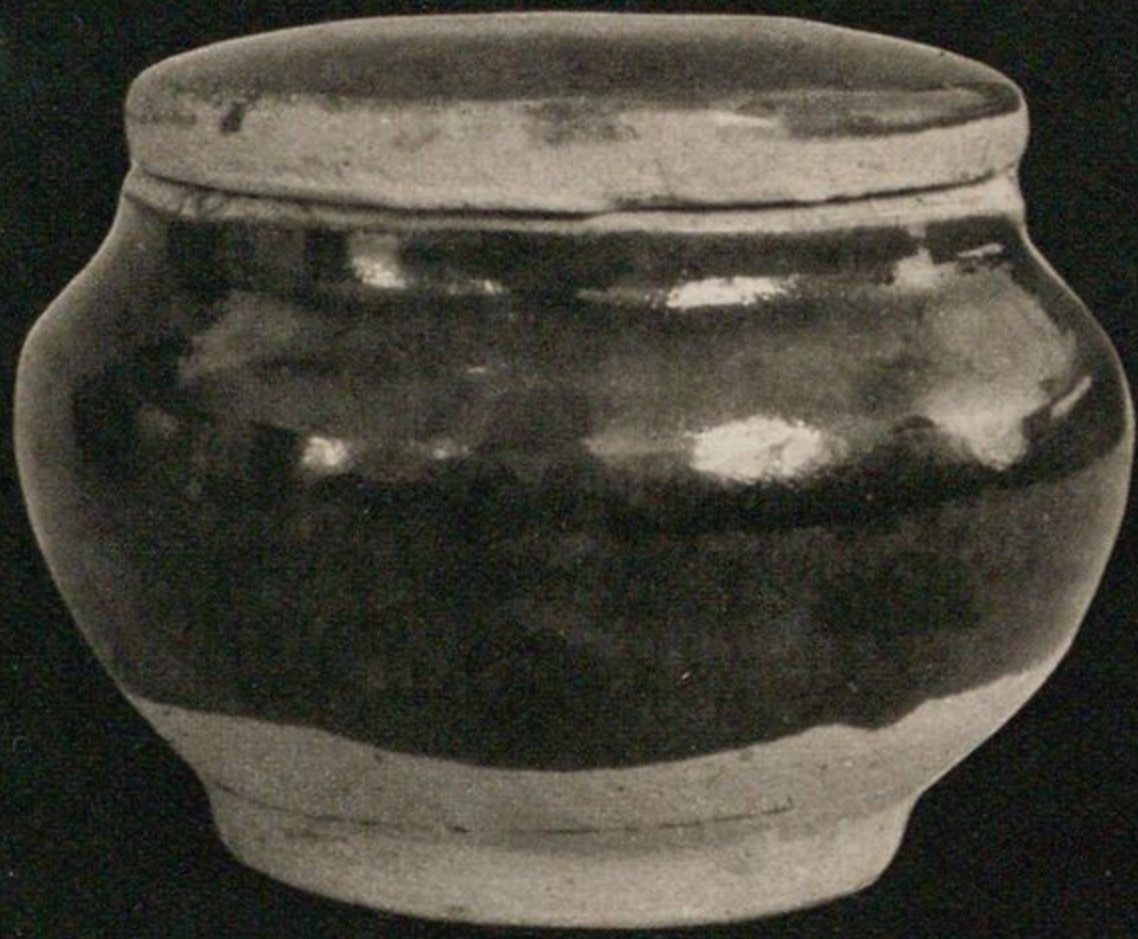
一、茶葉罐子
北京東郊產。唐三彩風の物、黃地に綠と褐色の釉が流してある。茶の葉を貯藏する壺。高さ約五寸

二、菜碗
山西盂縣產。外側の底部のみ黑釉なるも、その他は白掛けの碗。なかなか優雅にして茶趣味豐な物。同樣な碗は大行山脈中の各民窯にもあり、潞安の物も素晴らしい。大衆の日常食事に用ふるもの。直徑六寸

三、油罐
磁州彭城鎭產。黑釉の豐な美しい姿の蓋物。食用油類の入れ物。高さ二寸五分、直徑三寸

五

七

六

八

四、油罐
山西太原縣產。黑釉の小鉢、食用油を入れる臺所用具。直徑三寸

五、盤子
磁州彭城鎭產。白掛け地に鉄繪の皿。繪高麗を偲ばしめる美しい皿。食卓を賑はすもの。直徑七寸

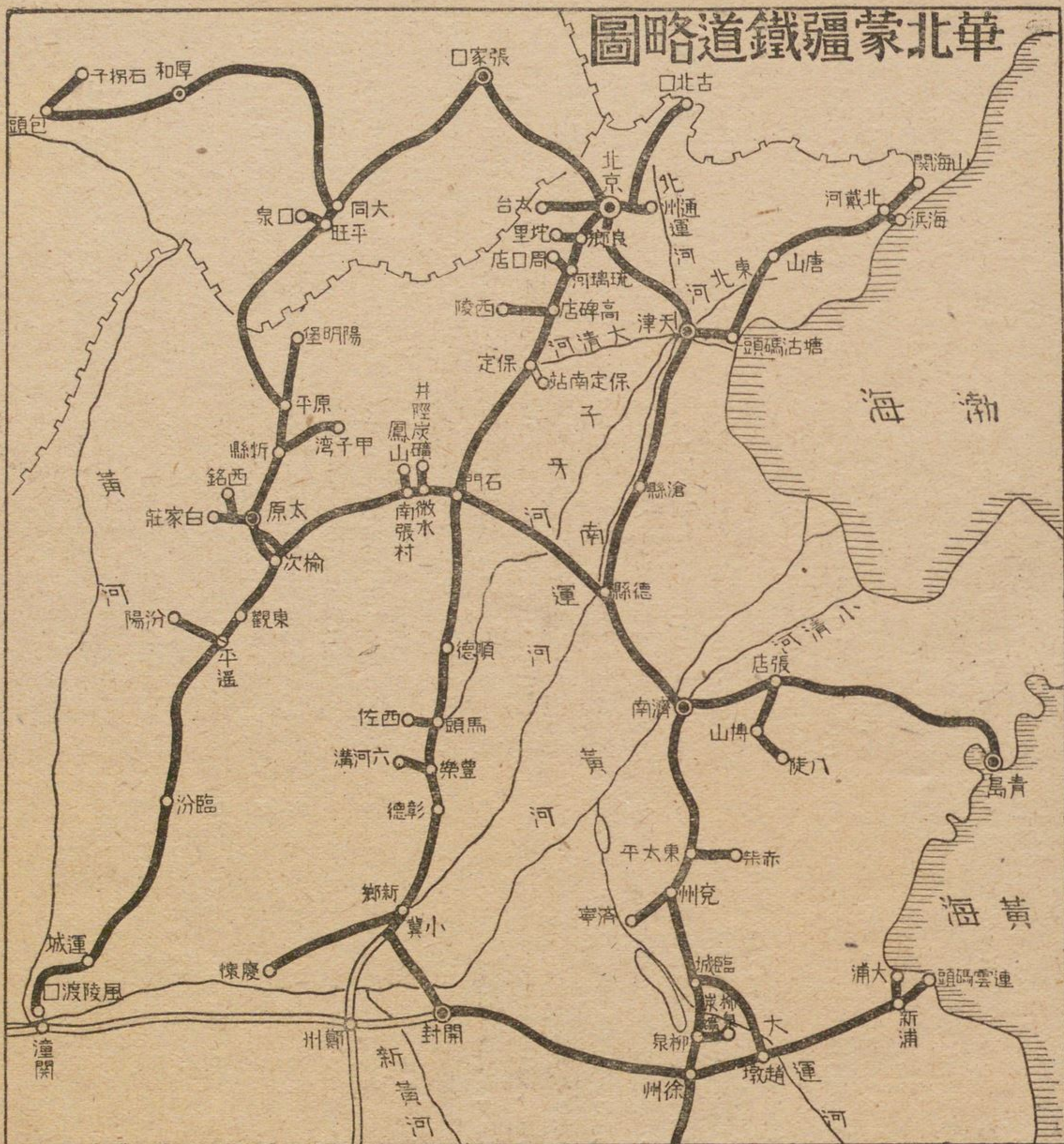
六、碟子
山東博山產。白掛け地に藍繪の小皿。直徑四寸

七及び八、碟子
蒙古淸水河附近（山西省西北方）產。白掛け地に藍繪の小皿。眞白な生地に太い力のある藍の線は實に美しい。食卓の取り皿。直徑三寸

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

書きよく
體裁優美
構造堅牢

クラウン万年筆

流線型

華北蒙疆鐵道略圖
張家口
古北口
包頭
石拐子
厚和
大同
口泉
平旺
北京
豐台
通州
北運河
周口店
良鄕
琉璃河
高碑店
西陵
天津
大清河
保定
保定南站
塘沽碼頭
唐山
北戴河
山海關
渤海
陽明堡
原平
甲子灣
忻縣
西銘
白家莊
太原
楡次
井陘炭礦
鳳山
石門
微水
南張村
子牙河
滄縣
南運河
德縣
小清河
東觀
汾陽
平遥
順德
西佐
馬頭
六河溝
豐樂
彰德
臨汾
黃河
新鄕
小冀
懐慶
運城
風陵渡
潼關
鄭州
開封
新黃河
濟南
張店
博山
八陡
青島
黃海
東太平
兗州
濟寧
臨城
柳泉
徐州
趙墩
大運河
大浦
新浦
連雲碼頭

内　容

北京の鳴り物（上）

早瀬　讓

北京にやつて來た友人の某君は、北京の印象を、物賣りの聲と、その鳴り物とで作曲してみたいと云つた。

北京の胡同に生活する物賣りと、その鳴り物は、たしかに豐かな北京の風俗を匂はせてゐる。かうした物賣りや鳴り物が北京に生れ、それが今日まで續いて來てゐるといふことは、多分に北京の町の特殊な構成と關係を有つてゐる。

＊

元來、胡同といふ語は日本の謂ゆる横丁をいふ言葉ではない。胡同とはもともと西域から傳はつた言葉で、城廓をいふ意味である。從つて胡同とは、城壁によつて圍まれた一廓をいふのが正しく、北京では城内の一廓をいふと同時に北京城全體も胡同といふことが出來るわけである。だから、今日われわれが胡同と呼んでゐる横丁は、昔は胡同と胡同との境界であり、また通路でもあつた。かうした特殊な城廓都市ともいふべき北京には、その城内に於ける生活に必要な日用品、雜貨、食料品等を供給する商賣が特異な樣式でもつて發達して來たことは云ふまでもない。

それは一見、非常に不便さうに見える胡同の生活でありながら、日々の生活に必要なものは何から何まで賣りに來る。ただそうした商賣人の呼び聲や鳴り物を、何を賣つてゐるかを聞き分けることさへ出來れば、菓子類はおろか、頭の先から足の先につけるものまで、不自由なく買ひ求めることが出來る。

しかも又それらの呼び賣や、鳴り物は、いづれも特色があつて、さうした物賣りの聲や鳴り物の音を聞いて存分に胡同の生活を樂しむことが出來る。

また、これらの聲や鳴り物の音は、胡同の奥深く住んでゐるものにも聞きとれるやうに、相當に高い、傍で聞いてゐると耳がいたくなるやうなものが多い。

例へば、羊頭肉賣りなどが、よく左手を（又は右手を）耳にあてて、呼び賣りしてゐる姿を見かけるが、これは自分の聲が大きいために、音痴にならぬ方法なのだ。また飴賣りの叩いてゐる銅鑼など、とても傍で聞いてをれば耳が痛くなる程である。

さうした事情から、北京の物賣りの使用する樂器には金屬製のものが一番多く、次が竹木製のもの、絲を使用したものが最も尠い。

齊如山の快著『故都市樂圖考』には四十種類の樂器をあげてゐるが、このうち半數の二十二、三種類のものが金屬製である。これは金屬製のものは、音が高くて、遠くまで聞えるからである。しかも樂器に使用する金屬は、斷然銅が多く、鐵製のものは三、四種を數へるに過ぎない。

＊

また、物賣りの側からその使用する樂器を見れば、賣卜者（盲者が多い）の使用する樂器の種類が一番多く竹板竹梶、小銅鑼（或は銅鉦）三絃、笛、鼓の五種類以上に及んでゐる。これは一般の盲者がさうであるやうに物を賣るのでなく、より多くその才、または藝を賣るといつた風があり、從つて器樂に對してもその技能方面が發達したためであると思はれる。

劉景晨題、舊都生活畫逛街者詩にいふところの『一竿細竹一銅鉦、園首茫茫說與鄕、且抱三絃上街去、老夫爛熟百年經』といつた趣は實に賣卜者の風采をよく傳へてゐる。

＊

次に、樂器の種類を物賣りによつて分類すれば

一、賣つてゐる代物とは無關係な一種の樂器を使用してゐるもの。これは一番多い。買鐸（ともし油賣）鑼（飴細工師、飴賣り）鍋（駄菓子賣、鑄掛師）鉦（食用油賣）雲鑼（小間物屋）鐵拍板（研ぎ屋）串鈴（扇子賣）小銅角（研ぎ屋）簧（理髮匠）冰盞（梅酸賣）虎撑子（藥賣）銅搖鼓（ともし油賣）鍋、簫（駄菓子賣）鼓（賣卜者）小鼓（屑買）大鼓（牛切屋）小鼗（反物屋）鼗（雜貨商）梆（食用油賣）小梆（菓子賣、饅頭賣、燒餅油炸果賣）聶兜姜（ねずみ使ひ）

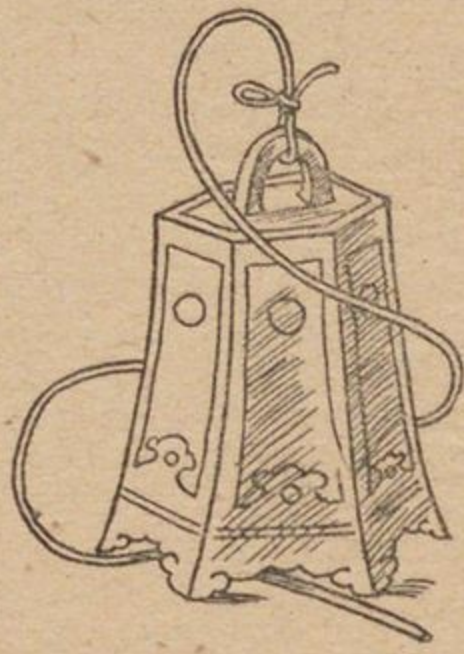
二、賣つてゐる代物を利用してゐるもの。盆（食器類）鞭（荒物屋）口琴（口琴賣）胡琴（胡琴賣）琉璃喇叭（ガラスラッパ賣）

三、物賣の使用する樂器を、そのまま鳴り物に使用してゐる。鑼、小鑼（門付の人形芝居）鼓、鈸（農人芝居）

四、物賣の使用する道具をそのまま

使用してゐるもの。釘尺（靴直し）報君知（賣卜者）

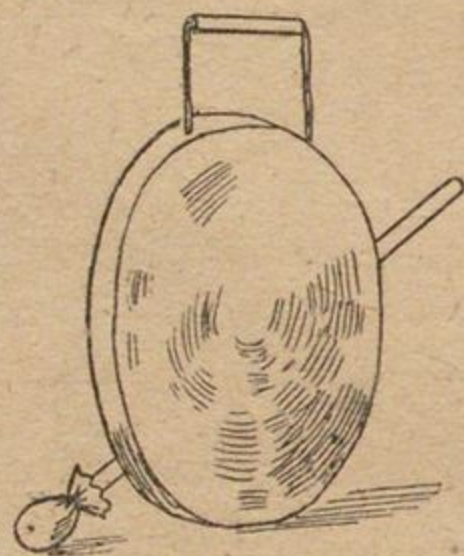
賈鐸（賣油者）

油賣りといつても、これは麻の實、落花生、棉の實などからとつた燈し油を賣る商人が鳴らして來る鳴り物である。普通に賈鐸のことを大鈴鐺（おほ鈴）といつてゐる。鐵で作つたもの、いはゆる昔の鐸である。寺の軒に吊して風の吹くたび毎に鳴り、よき音を立ててゐる大きな鈴は、風鐸と呼んでゐる。

賈鐸とは、商人の使用してゐる鐸と云ふ意味である。晉書荀勗傳に『初勗於路逢趙賈人牛鐸識其聲。及掌樂音未調乃日得趙之牛鐸則諧矣。遂下郡國悉送手鐸。果得諧者云云』とある。賈鐸とは、かかるところより出て來た名稱であらう。何れにしても古い形の鳴り物であり、これを使用してゐる商人も尠い。勿論一つには今日電燈が出來たため、次第に燈し油の需要も減り、商賣としては衰亡しつつあるためもあるのである。

鑼（賣吹糖人者）

鑼と鼓とは北京の胡同の鳴り物の双璧である。賣吹糖人者は、例の飴細工師で、飴を竹の管の先につけ、それを吹いていろいろの玩具を作る。子供相手の胡同の藝術家とでも云つた方が、感じが出るだらう。鑼は、その飴細工屋の鳴り物である。鳴り物の鑼の種類はきはめて多く、銅をもつてつくつてゐるから、われわれは銅鑼と呼んでゐる。

乾隆勅撰皇朝禮器圖式によれば、耕耤禾詞樂に鑼を使用してゐる。その鑼は銅を型に入れて作つたもの、金を塗り、表面は平らで、直徑は一尺三寸、深さは一寸六分、旁に二つの孔があけてあつて、黄色の紐をつけ、その紐をさげて槌で打つたと云はれる。一體、この樂器、鑼の起りは陳陽樂書によれば、後魏宣武次後は『沙鑼』を打つたとある。また鑼の形式で似たもののうち、その形により、大名銅鼓、小名銅鼓、大名金、小名鉦などと清朝時代には呼んでゐたやうである。

鑼（要猴者）

これは、門付けの猿芝居屋の使用する鳴り物で、飴細工屋と同じ種類の鑼である。

猿芝居にその囃として鑼を使用した歷史は古くて、その例は唐代にある。今日は、人寄せの鳴り物に使用してゐるばかりでなく、猿の藝當をする際の樂器と同時にまた動作を催させるにも

役立てゐるやうである。いま支那芝居にも大鑼を使用してゐるが、これは舞を節するに用ひるものであつて、俳優の出場、退場、その他いろいろの身のこなしをするときに使用されてゐるのも面白い。

鑼、小鑼（要傀儡者）

要傀儡者は、門付けの人形芝居師で

ある。彼もまた、その囃にといふよりは人寄せに使用してゐる。二つの鳴り物を使つてゐる點では酸梅糖賣の氷盞に似てゐるが、これはその二つのものを打ち合せるのでなく、互に叩き分けるのである。大きな音を立てるときと音を止めるときと云つたやうに、これも芝居と大いに關係があり、芝居に於ける小鑼は大鑼と錯綜して音節をなすに用ひるので、その用法は大體同じである。光緒會典にある禾辭桑歌樂に使用の鑼と同じであり、小さい方の鑼は時に無いこともある。正字通には『銅を形どつて作つたものである。その形は盆のやうだ』とある。

糖鑼（賣糖者）

飴賣りのことを北京では賣糖兒と呼んでゐる。この飴賣りが一種の鑼の鳴り物を使つてゐる。それを糖鑼と呼んでゐるわけである。この鑼は、中央が丁度淺い鍋を裏返したやうに高くなつてをり、周圍には極めて狹い緣がついてゐる。これは、漢代の『刁斗』（銅鑼の一種）に似てゐるといはれる。なほ、漢代のものは、漢書の記載によれば、銅を燒いて作り、その形は柄のついた小鍋のやうで緣はついてなく、その中には一斗を容れることが出來るといふ。

糖鑼の大きさは徑約七寸である。

糖鑼（賣要貨者）

子供の玩具や飴などを賣る行商人の鳴り物で、飴賣の糖鑼との違ひは、飴賣りが槌で叩いてくるのに、これはへらの形をした木片で打つて來る。

その大きさも飴賣りのより一まはり小さく、緣も約一寸ばかりある。齊如山は『安徽鳳陽一帶の花鼓戲に使用する鑼と酷似してゐるが、ただこれは懸けて置いて叩くだけである』と考證してゐる。

糖鑼（賣豌豆糕者）

賣豌豆糕者は、豆菓子賣りといふよりもむしろ、煮豆屋（但し日本流の煮豆とは異る）といつた方が早い。

これが叩いて來る鑼を糖鑼といつてゐる。その形は、賣要貨者の糖鑼と同じであるが、その持ち方がちがつてゐる。

彼は左手で下げて、右手の木片で打

つのであるが、これは左手でその緣を持ち起して、右手の木片でつづけさまに打つのである。ほんのちよつとした差であるが、その音は大いに違ふのである。

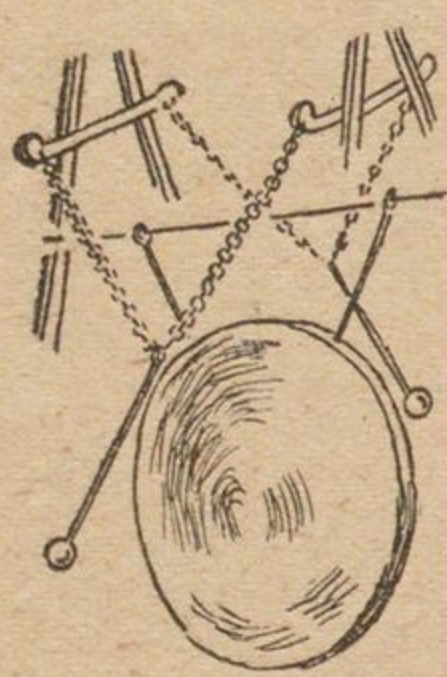
鍚（賣氷糖子者）

氷砂糖を賣る商人の鳴らして來る小銅鑼である。乾隆勅撰皇朝禮器圖式には、欽定凱旋歌樂の鍚は、銅を形どつ

て作り、表面の徑は二寸七分、口徑三寸一分五厘、深さ六分、二つの孔をあけて、黄色の紐でこれを結び、木片をもつてこれを打つたとある。

この樂器は、青海西藏方面から傳來したものだといひ、青海西藏方面からは錫と同時に『星』といふ樂器が傳はつてゐる。『星』はまた唐書によれば『鈴鈸』と出てをる。欽定凱旋歌樂星には『銅を形どつて作り、左右を打ち合せる。その口徑は一寸八分、高さ一寸、厚さ一分、中の隆起四分、腰の廻り三寸、各に孔があつて白い布でこれを通した』とあり、今でも支那芝居ではこれを使用してゐるが、二つの銅の杯を使用する點、氷盞と似てゐる。もちろん、その使用する方法はそれぞれ異る。

錫（小爐匠）

いかけ屋のことを北京では小爐匠といふ。彼は瀬戸物のこはれたのも直せば、茶碗もなほし、また銅器や鐵器をも修理する。このいかけ屋も錫を鳴り物に使用してゐる。だが、氷砂糖賣りと違つてゐる點は、いかけ屋は決して手で打ち鳴らさない。

民社北平指南の鋸碗（いかけ屋）の項には『いかけ屋の擔いでゐる荷の一方には一つの小銅鑼（錫）がかかつてゐる。鑼の前後には、各小さい鐵のおもりがかけてあつて、荷を擔いで歩くにつれ、それが搖れて音を立てる。その音はチン、タン、チンといふ』と述べてゐる。また見工藝條の小爐匠の註には『ふいごの上に小銅鉦（錫）と銅のおもりがかかつてゐて、行くにつれて自らこれが打ち合ふやうになつてゐる』とある。

なほこの錫は、光緒會典の銅を型どつて作り、表面の直徑が二寸七分といふ凱歌樂に使用する錫と、酷似してゐる。

鉦（賣香油者）

賣香油者は、食用胡麻の油賣りである。この食用油賣りの鳴り物は鉦といふ、鑼とは異つたものであつて、俗にこれを點子と呼んでゐる。鑼は緣がついてゐるのに、これは只一つの圓い銅

片である。そして、その面は扁平で、古の鉦に似てゐて、その呼び名と形式は實に多い。胡鉦、鼓吹鉦、警嚴鉦等等はみなこのことである。

光緒會典にいふ鐃歌鼓吹樂に使用する鉦は『銅を型どつて作り、その形は磬の如く、面平、口徑八寸六分四厘云云』とあるのとよく似てゐる。しかし今日油賣りの使用するものは、極めて細い緣がついてゐて、それに二つの鐶がついてゐて、更に把手に木管を嵌めた銅の吊り柄がついてゐる。

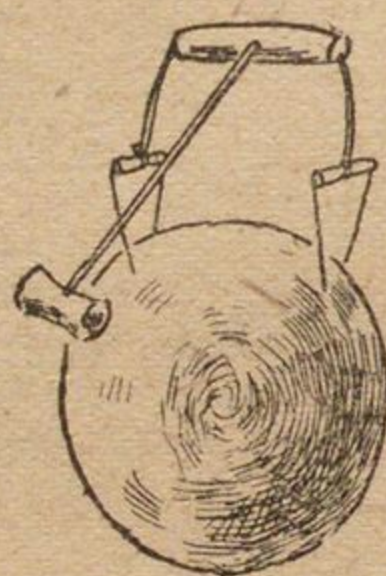
樹頭初日掛銅鉦（蘇軾詩）

鉦如大銅、疊懸而擊之、南蠻之器也（樂書）

全鉦二制如銅槃懸而擊之（元史禮樂志）

などとある鉦は、いづれも同じものである。

銅點（賣卜者）

賣卜者といつても、これは盲のうらなひ師の使用する鳴り物で、俗に點子といふ。光緒會典にある『銅を型どつて作り、形は銅鼓の如く、面徑四寸八分五厘、深さ一寸八厘、中隆起四分八厘六毫、徑一寸六分二厘、槌をもつてこれを打つ』といつた鐃歌大樂、鐃歌清樂用の銅點はこれで、支那芝居の歌

謡高腔に使用する多字鑼は、この銅點と同じ製法であるが、ここに云ふ銅點は稍〻形が小さい。多字鑼はまた、光緒會典のなかでは、銅鼓と呼ばれてゐる。

賣卜者は、これに吊り手をつけ、その把手のところに槌の柄をとりつけて片手で、多くは左手でコン、コンと打ち鳴らして行くのである。（續く）

（筆者は東亞新報連絡部長）

寒食節と介子推

支那人の意地

石原巖徹

南部同蒲線（山西省）に介休といふ站（驛）がある。この站の東北四支里に介山といふ山があつて、山下に介子堆を祀つた廟がある。介子堆は一名介堆、春秋戰國の世の晉の國（今の山西省）の人で、正史上にも有名な名君と謂はれる晉の文公の臣下であつた。

文公は、幼名を重耳と言ひ、若い時は不遇で、父君獻公の妾室驪姫が、日本の大名の御家騷動と同じく、自分の生んだ子に後を繼がせようと謀み、そのために父子仲違ひとなつて、身邊の危險を感じたので、晉の國を去つて他の國に亡命した。

後に齊の桓公の處へ行つて暫らく食客となつたが、その途中の流浪中、衞國の五鹿といふ處（今の河北省大名縣附近といふ）で、危うく餓死せんとした時、從つてゐた數人の臣下の一人であつた介子堆は、自分の股の肉を切つてそれで湯（汁）を作り、肉湯だといつて文公にすすめ、餓をしのがせたといふほどの忠臣である。

後に至つて、奸人は滅び、文公が齊から歸つて、晉の王位に卽いた時、臣下に對して大いに論功行賞を行ふことになつたが、その際何故か、あれ程の忠臣介子堆が賞に漏れた。

東周列國志の記すところに依ると介は、性甚だ狷介の男で、同僚の者共が恩賞の噂をして、互ひにおのれの功を吹聽してゐるのを見てニガニガしく思ひ、病氣と稱して家に引き籠り、清貧を守つて、鞋を作り、老いたる母を養つてゐた。そのために、久しく彼の顏を見なかつたので、文公も行賞の際、うつかりして彼のことを忘れてゐたのだといふ。

か程の忠臣を忘れる文公もどうかしてゐるが、人間には往々かうした失敗はあるものである。（尤も文公は、漏れたものがあれば申し出てよといふ告示は出した。）

ところが、介の隣に住んでゐた解張といふ男は、これを聞いて大いに不平を抱き、介にそれを告げると、彼は笑つて相手にしない。しかし、母は恩賞を受けた方が生活が樂になるからと、一度は申し出ることを勸めてみた。

だが、介子堆は言つた。

『獻公の子九人の內、我が主が最も賢なので、天は、國を我が主に與へたのだ。これは天意であつて、人間の功ではない。それを知らずして、功を爭ふが如きは自分の耻とする所である。自分は一生鞋作りに終つても天の功を貪つて自分の力とすることは敢へてしない』と。母は、

『それならそれで好いが、一應宮中に出向いて、文公に謁見してはどうだ』と云つたが、

『主に對してなにも求めるところは無い』と、頑固である。

母も彼の意氣を壯として、

『汝が廉士にならうとするなら、母も廉士の母とならう。この上は、市井の中にあくせくするよりも、深山に隱れてしまつた方が好い』と云つた。介は大いに喜んで、直ちに家を引拂ひ、母を扶けて都（絳城）を遁れ、綿山といふ山に入り、そこに廬を結んで、木の實、かやの實を喰べて、仙人もどきの暮しをすることになつた。

これを見てをさまらないのは、隣の男、解張である。

暗に介子堆の事を諷した詩を書いて或る夜、それを宮廷の門に懸けて置いた。翌朝近臣がそれを發見して文公に報告する。見ると、

龍の矯々たる有りき
其所を失ふを悲しみ
數蛇之に從つて天下を周流す
龍飢ゑて食乏しく、一蛇股を割す
龍淵に返り其の壤土に安んずるや
數蛇穴に入りて皆宇に寧んず
一蛇穴無く中野に號ぶ

と書いてある。

始めてシマツタと思つた文公は、早速人を遣して、介を召し出させたが、右の始末で、もうその家には居ない。隣近所に問ひ合せると、解張が出て來て、實はこれこれで、あの詩は介子堆の知つたことでなく、自分が作つたのだと云ふ。よく知らせてくれたといふので解張は、下太夫といふ役にとりたてられた。

文公は、解張を案內役にして、親ら近臣を從へ、綿山に向つて介子堆を迎へに行くといふ丁寧な方法を取つた。かほどの忠を忘れてゐたことに對する自責の念に堪へなかつたわけである。

さて、綿山に着いて八方手を分けて

探したが、どこにゐるのか皆目行方が知れない。探すこと數日、つひにシビレをきらし、そこで思ひついたのが、介子推の親孝行といふことである。

いつそ山に火を放けて燒いたならば彼は母を助けるために下に降りて來るであらうといふので、燒討ちならぬ火攻めの計を用ひた。だがそれも効果は無く、三日三晩燃え續けて、やうやく火が消えた時、とある谷あひに二組の骸骨が折重なつて横たはつてゐるのを發見した。頑固な介子推は、母もろともに燒け死んでも、その志を曲げなかつたのである。

それを見た文公は、涙を流して彼の志を憐れみ、且つはその意地の强さを恨んだ。そしてその骨を山下に厚く葬り、祠を建てて永く介子推の靈を祀ることにした。同時に綿山の名を改めて介山と呼び、その功勞を記念することにした。今日介山と呼んでゐるのは、その時以來のものである。又土地（今は縣）の名を介休と呼ぶのも、介子推から來てゐると言はれる。

文公が綿山を燒いた日は、三月五日（無論陰曆）で、丁度淸明節の前日に當つてゐたといふところから、後世になつて―何時から始まつたか明らかでないが―淸明の前日を寒食節と稱して火絶ちの食事をする風習が生れた。

これは生のものを食べるのか、前の日に作つて置いて冷たくなつた食物をその日に火を加へないで食べるのか、どちらか判らないが、とにかく介子推が燒け死んだことに同情して、火を忌むといふ意味から來たものである。

列國志に依ると太原、上黨、西河、雁門等の地方（いづれも山西省）では毎年冬至から數へて百五日目の日に、豫じめ乾糧を作つて置いて、それを冷水で食べるといふ風習があり、それを「禁火」又は「禁烟」といふとある。又、この寒食節には、家の門に柳を挿して介子推の靈を慰めるといふ風習があるといふ。柳を使ふのは、介母子が枯柳の下で死んだといふ言ひ傳へから來たものと思はれる。

今日は果して實際に寒食節を修する風習がどの程度まで殘つてゐるか、恐らく殆んどすたれてしまつたと思はれるが、これは端午の粽に於ける屈原の場合と同じく、興味の深い民俗資料である。卽ち昔の賢人の事蹟を記念してそれを民間の年中行事にまで用ひるといふことは、支那人の思想の内にも、財や福利の外にかうした優にやさしい部分があるといふことが知られるのである。

この物語は東周列國志といふ稗史小說に出てゐるのであるが、支那人の間には傳說と同じものになつて傳へられてゐる。この傳說に對して考へられることは、支那人の生活感情の中にある一種の意地といふことである。支那一流の面子論に言はせると、介子推の心事は、『別に報酬を求めるために忠勤をぬきんでたものでなく、賢人の德に對する純情から發したもので、それに對して恩賞を受けるのは、廉士としていさぎよしとしない』といふところに在るが、『廉士』たるの面目を全うするために支那人一般が人世第一の道德と心得てゐる『親に對する孝行』をまで犧牲にしたといふ事は問題である。

列國志の評註者もこの點は介子推のために惜むと言つてゐる。筆者は穿つた說を好むので、これは介子推が文公から、たとへ一時の失念にもせよ、あれだけのことをしたのに忘れられたといふことに對する抗議の意味から、ヨシそれならば死んでも行賞は受けてやるものかといふ意地になつたのだと解釋する。

さうでなければ、文公があれだけ過失を認めて、王侯の高位を以て親ら綿山まで出向いて迎へに行つたのに、出て來ないといふ心理の解釋がつきにくい。尤も火攻めの計を用ひたのは、彼の孝心につけこんだといふ點に却てその意地に油を注いだ觀があるが。

それはとにかくとして、廉士の廉なる意義は、文公がいさぎよく過失をみとめてあやまつて來た時に、アツサリうちとけるといふことでなければならぬ。だからこれは廉士の面目を立てたことにはならないで、意地ツ張りの意地を張り通したといふことになる。

列國志の作者も支那人一流の面子主義者と見えて、筆者の言ふやうな點には微塵も觸れてゐないが、筆者はあくまでこれは意地を骨子とする傳說だと解釋する。事實、支那人の感情にはこの意地といふものがあるので、後人が介子推の事蹟に興味を覺えるのも、その點の共鳴から來たものと考へる。

この意地の問題は、蔣介石その他抗日分子の今後の態度を觀察する上に、或る程度の指針となるのではないか。

因みに、この物語は支那劇に『燒綿山』の題名で仕組まれてゐる。以前は相當演ぜられたが、今日はこれを演ずる者が殆ど無い。演出がシブ過ぎるのと介子推の役がむづかしいので、勞多くして効少しといふ所から、敬遠されたものと思はれる。

（筆者は華北交通資業局參與）

支那の葬式

橋本泰治郎

諦めがよいといふのか、用意周到であるといふのか、この國の人は生きてゐるうちから棺を買つておく。自ら求めて死の催促をするやうであるが、それはわれ／＼の考へ方であつて、彼等は決してさう思つてゐない。さう思つてゐないばかりか、これあるが故に却つて長生きが出來、おまけに財産が殖えるのだと信じてゐる。といふのは、棺は支那語で棺材といふが、死人の這入つてゐない棺は棺材と云はず壽材といひ、壽材を買つておくといふことは『有壽有材』であり、これは『有壽有財』の音に通じるからである。まことにめでたい限りのものである。

ところで、この壽材は一定の月に買つたり造らせたりするのである。一番よいのは閏月とされてゐる。その譯は同じ閏月は數十年後でなければ廻つて來ないので、本人が生きてゐる間に再び棺を買つた日が廻つて來るやうなことがないからである。從つて『さうだ、去年の今日棺を買つたのだ。あれからもう一年になるが、自分の壽命も一年縮んだな』など云ふやうな情ない思ひ出を起すことがない。棺は時間を超越して、何時とはなしに天から降つて來たことになる。

壽材は普通家に置くが、置く場所のない人は棺屋に預けておく。そしてその外部の頭に當るところに、赤い四角な紙を貼り『壽』の字を書いておく。棺屋の棺の中にさうしたのを見受けることがあるが、それは買約濟といふ標である。

面白いことには、『壽』の赤紙を貼つた壽材の中には、大抵『不倒翁』（起上り小坊師）が入れてある。御當人がダルマのやうに何時までも倒れないといふまじなひである。

中に何も入れて置かないと空材（空財）即ち財産がなくなるが、何か入れておくと有材（有財）即ち財産が殖えるといふのである。かやうに此の國の人は財が好きである。

だが、如何に多くの財があり、如何に立派なダルマが入れてあつても、生殺與奪の權を握る閻魔大王をその威力で買收したり屈伏さすことは絶對に出來ないことである。敢て老若男女を問はず、何時如何なることがあつても、この閻魔大王の命令一下、即刻十萬億里の彼方にある彌陀の國へ、しめやかな輓歌の聲に送られて行かなければならない。それは極めて嚴肅である。少しの『待つた』も許されない。

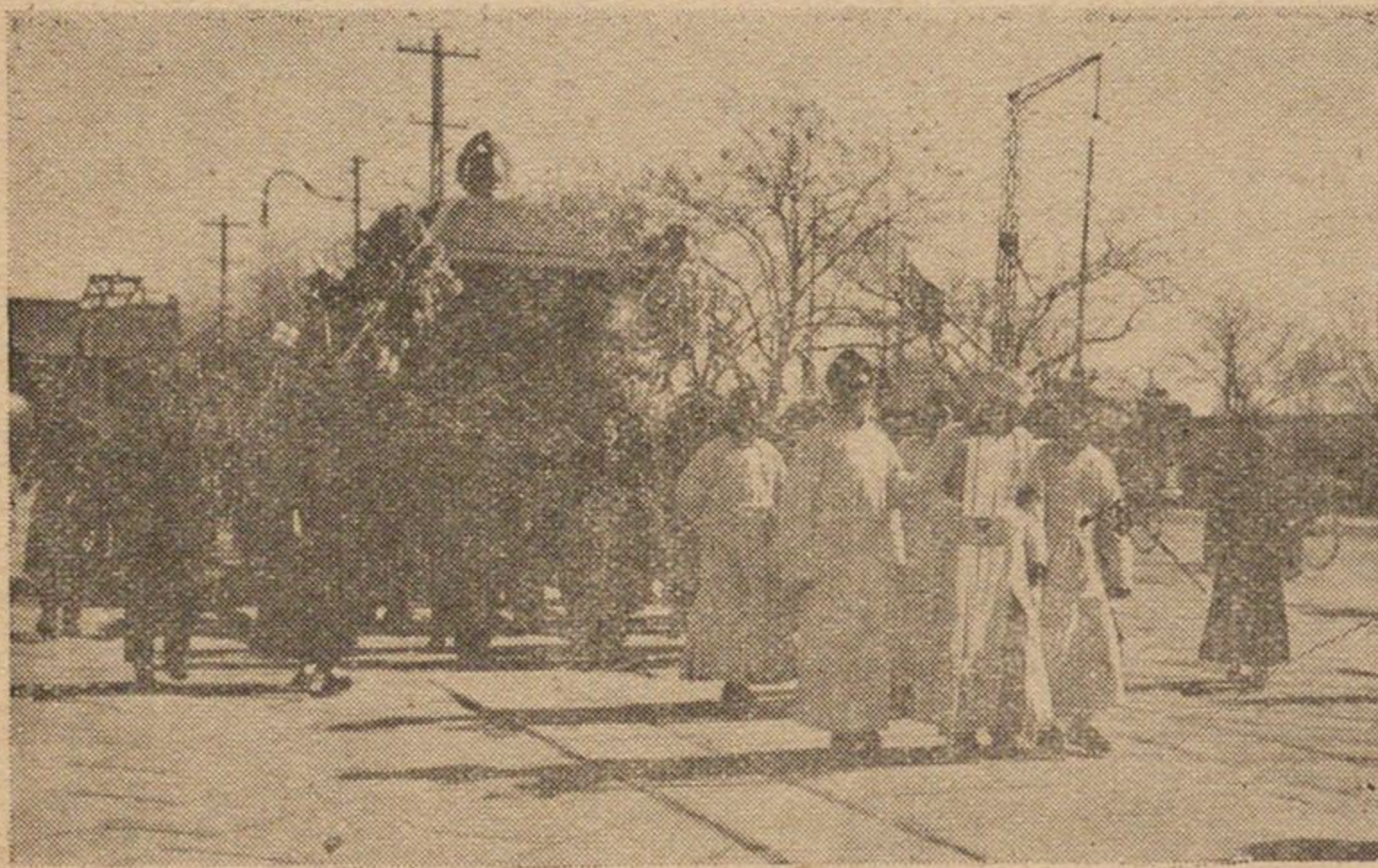
かくて閻魔大王の魔手が差しのべられ、玆に死に瀕した重病人があつて、いよ／＼臨終が迫つたと假定する。われ／＼日本人の情としたら、一家眷屬は言ふに及ばず、近所隣の人や知己まで多數その枕頭に集つて、重苦しい空氣の中に誰もが息を殺して最後の一呼吸まで看護つてやり、そしてせめてもの末期の水で脣を濕らして、たとへ一秒間なりとも息をながらへてやらうとするのであらう。

ところがこゝ大陸ではさうでない。最早此の世では立ちなほる見込みがないと見てとるや、早速床屋を呼んで、委細かまはずその重病人の頭を剃り落し、あの世へ旅立つ淨めのお化粧をする。が、地方によつては枕の當る後頭部は剃らないところがある。それは、留後（留下後輩）といつて、子孫を殘すといふまじなひである。女の場合は赤い紐で髪を結ふ。

丸坊主になつた重病人に有無を云はせず、壽衣を着せる。壽衣はわが國の經帷子に當るもので、これも棺を買ふ時に一緒に買つておく。壽衣には、皮革、緞子（繻子）、領子（襟）、帶子（腰紐や沓下止めの類）を一切用ひない。皮革を用ひると畜生になつて生れ變り緞子（斷絶子孫）を用ひると子孫を斷ち、領子（領子孫—子孫を連れる）、帶子（帶子孫—子孫を連れる）を用ふると、子供や孫が死ぬといふのである。

また壽衣には結仇疙瘩（紐釦）をつけない。それをつけると、死んで行く者と生きてゐる者とが來世に於て仇となるといふ。

槓房と云ふ葬儀屋から、息を引き取るために用ふる寢臺を取寄せて、堂屋（北房の中央の部屋）に置き（貧しい者は土間に板を並べ）その上に敷蒲團を敷く。この國の人は、病人が日頃起居してゐる寢臺やオンドルの上で息を引取ることを極度に嫌ふ。それほど緣起の悪いことはないといふ。

死人の裝束をした丸坊主の重病人をその寢臺の上にかつぎ込む。かくして

息を斷つた者は正しい死に方をしたことになる。われ〳〵が疊の上で滿足な死に方をするのと同じである。

訃聞の中に壽終正寢（堂屋に於て齡を完うした――父の死の場合）といふ文句があるが、そも〳〵これを意味するのである。

息を引取ると、佛の足に絆脚絲といふ白い紐を巻く。死人が急に起ち上つて駈け出さないやうにといふまじなひである。柩の上に刀やナイフを置く日本の風習とよく似てゐる。

日本のそれは魔物、猫が死人に接しないやうにといふまじなひであるが、猫に就ては支那でもこれと同じやうなことを云ふ。卽ち猫や犬が死人に觸れたり、死人の枕許を通過すると、死人が急に起ち上るといつて、猫と犬とは柩のある部屋には絕對に入れない。

葬式の行列（北京）

息を引取ると同時に燈をつけて寢臺の下におく。これを引魂燈又は悶燈といふ。靈魂があの世の大裁判官、閻魔大王の許へ闇路を通つて出頭するに當り、道を間違へないやうにといふ燈火である。それは出棺の時までつける。

同時に柩の前で倒頭紙大門の外で倒頭車（紙製の車馬轎子）を燒く。倒頭車は、あの世へ旅立つ靈魂の乘物である。

赤い布、又は紙で包んだ茶の葉（地方によつては銅貨。金持は瑱珠）を佛の脣に銜へさせる。これを含（この場合には去聲に讀む）の禮といふ。佛に物を食べさせて送り出し（空口〝何も食べず〟のまゝ冥土に行くのはよくないといふ）、兼ねて死體の腐敗を防がうとする二つの意味がある。

佛の上に陀羅經被といふ梵字を書いた布をかける。死者がこれを携行して行くと、閻魔大王がその心掛けに感心して、死者生前の罪を輕くして吳れるといふ。謂はば冥土行のパスポールトである。

それが終ると、佛の前で一家眷屬の者が十五分乃至三十分間程慟哭する。これを擧哀といふ。祖父母、父母、夫の場合には跪いて、兄弟姉妹の死の場合には立つて、子の場合には腰掛けて慟哭する。

白い喪服に改める。これを穿孝といふ。喪主はこれより出棺までの間、他人からお悔みを言はれたら、如何なる人に對しても（例へばボーイに對しても）磕頭の禮を以て應へる。喪家頭滿街流といふ言葉がある。しかし、晚輩（後輩）又は平輩（同輩）の死に對しては、如何なる人に對しても磕頭をしない。

陰陽（二宅ともいふ）といふ葬儀占者を呼んで、納棺、告別式、出棺など

の日取りや時刻を決めて貰ふ。これを開殃榜といふ。これと同時に警察署に死亡屆を出して、抬埋執照（出棺埋葬證明書）を貰ふ。

最も親しい知己や親戚に取不敢ず死の通知をする。之を口報といふ。口報に接して、直にお悔みに馳せ參じることを探喪といふ。探喪に行つた人は擧哀の時と同じやうに慟哭する。

親戚知己の中の或る者に、知客と云ふ葬儀進行係兼接待係をして貰ふやうに頼むのである。知客が葬儀に關する一切の世話をする。

占者の決した日の時刻に入棺式を行ふ（これを入殮といふ）。入殮に參加する者は一家眷屬の者に限る。先づ綿又は布を茶又は水に濕らして、佛の眼鼻耳唇顏を拭く（開光といふ）。これは日本の湯灌に當るものであるが、支那では沐浴はさせない。ところが、回教徒は沐浴をさせ、おまけに管で死人の內臓までも洗つてやるといふ。

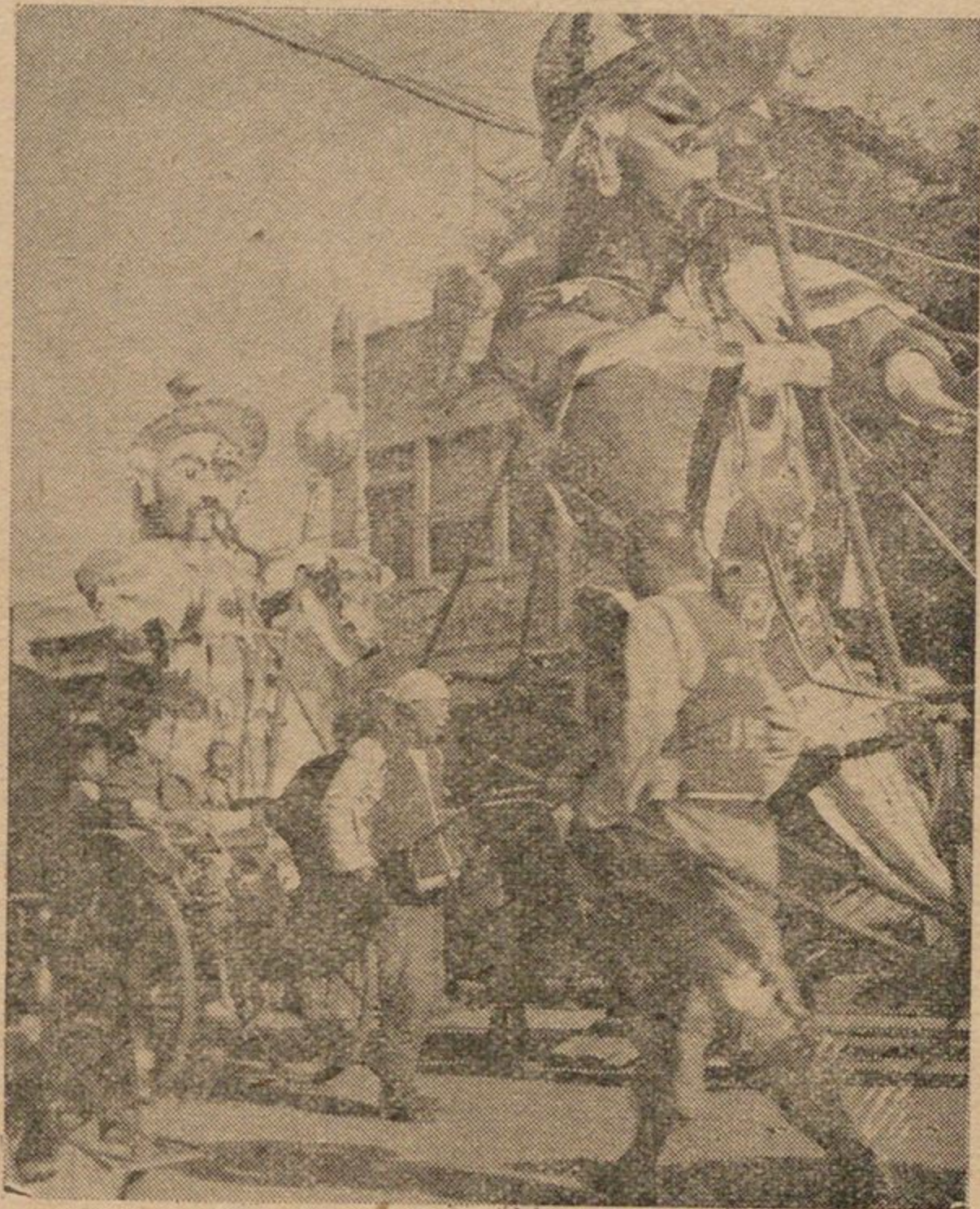
納棺に當つては生前の愛用品を入れるのであるが、これあるがため支那には墓地荒しも多いわけである。

納棺が終つて棺に釘を打ち、また擧哀の時のやうに慟哭する。そして一家の者は出棺時まで棺の兩側に起居するのを原則としてゐる（これを守靈といふ）。長輩（上長）、平輩（同輩）の者は晩輩（後輩）、平輩（同輩）の死に對しては守靈をしない。

占者が若し犯重喪（續いで死ぬ者がある）の慮れがあると云へば、棺の下に鏡を置く。出棺の際、棺の前方に在つてその鏡で柩を映しつゝ、大門の外に出てその鏡を地に投げつけて割るのであるが、これは鏡の中に棺が映るので本物の棺と共に二つの柩が出る勘定になるから犯重喪の慮れがないと云ふのである。

葬列の先頭に立つ方相（方相は冥途の露拂ひの意）

この頃、親戚知己から花圈、幛子、香燭、燒活などが届けられる（輓聯は文句を考へるから少し遅れる）。またこの頃訃聞（正式の死の通知狀）や哀啓（死者の履歴を書いたもの）などが發送される。

死後三日目の朝、近親者の女達が料理を拵へて（その實、多くは料理屋から取寄せて）佛前に供へる（開煙火といふ）、供物の中には魚肉もある。

その日の午後、接三の式を行ふ。倒頭車に乘つて陰間（あの世）に行つた故人の靈魂を迎へて、供養をする式である。親戚知己が大勢參列して、僧侶が讀經する。此の日には普通ウドンが出る。そして日沒頃、打揃つて、靈魂を路傍まで送り出し、そこで紙製の車馬墩箱を燒く。これを送三といふ。

送三に似た式で送庫といふのがあるが、これは日沒前、街道で紙製の樓庫（多くは二階作り一棟と平家作り二棟であつて、卽ち冥土の居住を意味し、中には紙元寶が這入つてゐる。紙元寶は冥土で使ふ銀塊の意である）を燒くのである。

出棺の前日に、僧道喇嘛親戚朋友を集めて告別式を行ふ。これは開弔とて、接三以上に重んずるものである。この開弔に行く人は奠金（香奠）を持つて行く。從つてこの日を領帖（香奠を拜受するの意）の日とも云つてゐる。

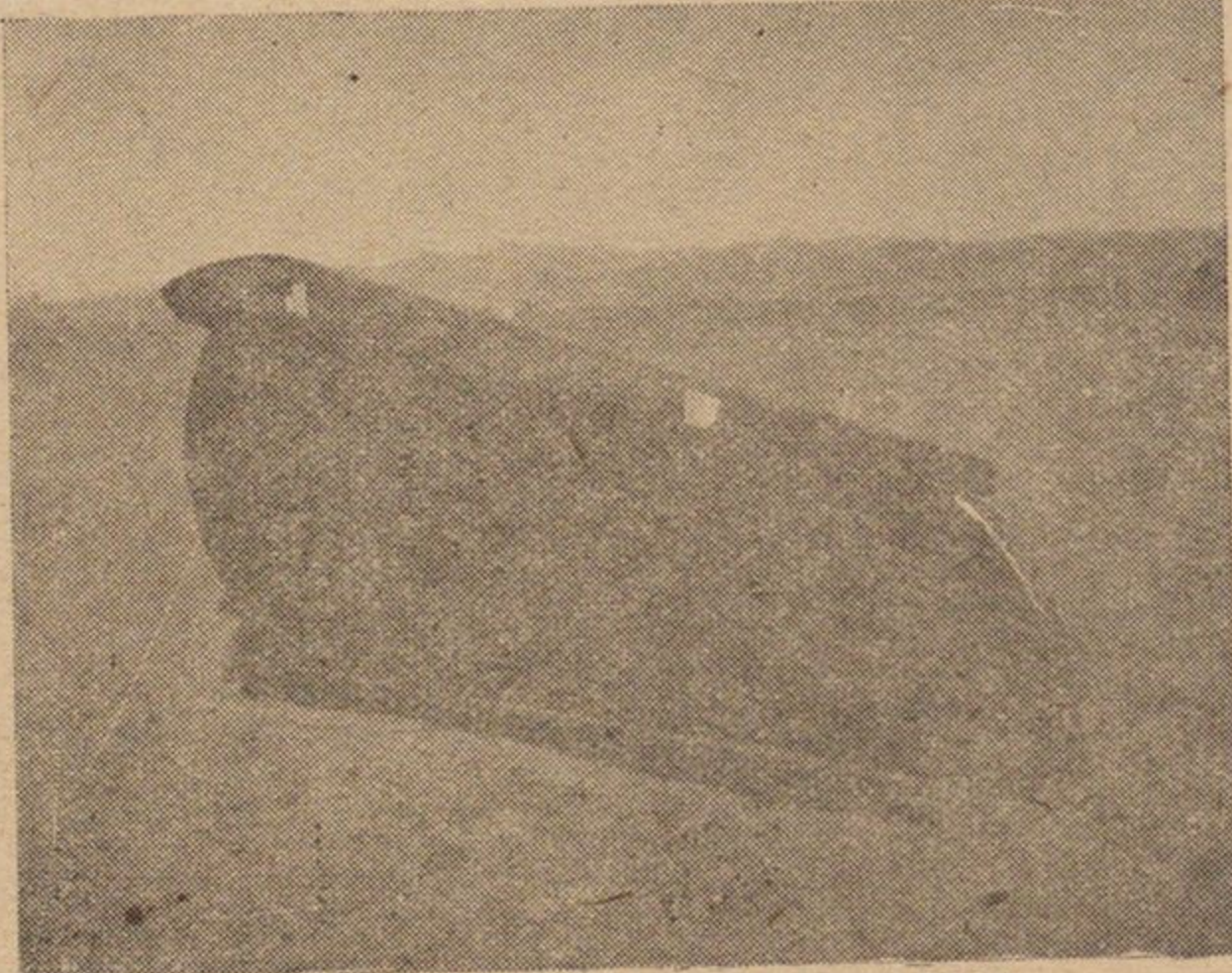
開弔の日には御馳走が出る。御馳走を食べてから、前に述べた送庫の行列に加はる。開弔に行つた人は、送庫が終つてから歸るのを禮儀とするが、親しい知己や親戚の者は故人との別れを惜んで當夜は最後のお通夜をする。これを伴宿とか坐夜とか云つてゐる。伴宿の前半夜、柩に對して磕頭をするが、これを辭靈といふ。

かくして夜が明けたら出棺である。出棺は發引、出堂、又は出殯といふ。發引は死後五日目、七日目、九日目、

十一日目、十三日目、十五日目、二十一日目、三十五日目、六十日目にするが、一番普通なのは五日目、七日目ぐらゐである。但し下層社會では三日目ぐらゐにするのもある。

いよ／＼出棺の時刻になると、一同參靈をする。ピー、ドンドンと云ふ樂の音が流れ出す。しめやかなるべきこのピー、ドン／＼は、われわれにはどう考へても陽氣な春祭りの笛や太鼓の音にしか聞えない。

柩が大門の外に出る。喪主は柩の前に跪く。煉瓦一つと、底に大きな穴のあいた鉢が一つ運ばれて來る。喪主は、その鉢を持ち上げて煉瓦にぶつつけて破る。これを摔喪盆子といふ。

閻魔大王は、人間が現世で飲食物を粗末にして棄てたとすると、その本人にそれを死んでから食べさせようとして、小鬼に運ばせて來る。勿論その頃にはもう腐敗してゐるだらうから、これを食べればお腹をこはす。何とかしてこれを食べさせずにおく方法は無いものかと現世の人の思ひやりがこの底の拔けた鉢を考へついたのである。これならいくら饑いものを澤山盛られても全部下へ漏つてしまふから安心である。たゞ食べる眞似をすれば閻魔大王の前は無事にすまされるわけである。

死者に餞別の品としてのこの鉢を贈るのであるが、生きてゐる人に對する戒めでもあらう。

葬式の行列は大通りに出て、出來るだけ大廻りをして、限なくねり歩く。親に對する最後の孝道を盡すといふのである。

墓地では、山地なら頭は高い方に向けて埋める。平地の場合は頭部は道路の方にして埋める。義地（共同墓地）の場合は、他の棺と重ねて十文字になるやうにする。

また、客死した場合など柩を故鄕に持つて行くまでの間、寺や會館（謂はば日本の縣人會事務所に當るもの）に預けることがある。之を停靈といふ。

また色々な都合で棺の周圍に煉瓦を積んで假埋葬をすることがある。これを甃起來といつてゐる。

以上は長輩の死に對する行事であるが、晩輩の死、殊に幼兒の死に到つては情けも何もあつたものではない。粗末な棺に死體を入れて、槓房の人夫に墓場の隅か野らに捨てて來て貰ふやうに賴むのが普通である。お經もあげなければ墓標も立てない。全く犬猫同様の取扱ひ方をする。父母に先立つて死んで行く者は親不孝者である、親不孝者の葬儀を人間なみに執行すると、他の子供までがいい氣になつて死んで行くといふのである。

さうかと思ふと、妻も迎へずに夭逝した息子の身の不憫を思つて、その靈を慰めるべく、年頃で死んだ娘を貰ひ受けて、息子の墳墓の側に埋め、死人同志を結婚させることもある。

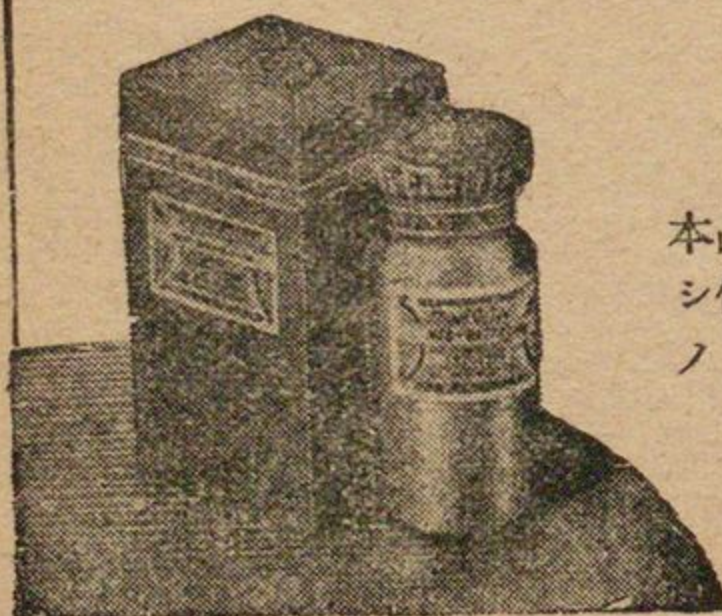
（筆者は新民會部員）

平原に放置された棺（包頭城外）

紅と白

勝又大啞

一

北京に來ると色感彩覺に異常を呈する樣だとは、數年前に旅行者の一人が述懷した言葉であつたが、私はそれを只だ單なる述懷の言葉以上に買ひ取つて、科學的に研覈すべきではないかと以來ずつと考へ通しては來たものの、土地の濕潤、塵埃の空氣に混入する度合、太陽光線の强さ、紫外線の多寡、及び食品の人體に及ぼす影響等々と思ひ廻らして見ると、仲々私ごときもののかかはる問題ではなささうだ。

又北京の色彩とか色調とか言ふものは、赤・青・黄の三原色に、黒と白の二色を合せて、五彩絢爛としてゐるとは、誰しも唱へるところであつて、五彩絢爛と言へば如何にも多彩に輝いてゐる樣だが、少し色調に纖細な神經の働く者から見れば、實に間拔けた、茫漠とも荒涼とも何とも言ひ樣の無い調子外れと寂し味とを禁じ得ないのである。

灰色の壁と壁の間を通ずる胡同、鼠色にどす黒い大地、どこ迄も青一色の天空、勅建を誇る黄色い屋根瓦、そして封建の色褪せ獨善に戰く朱門、かう言つたものが北京の澱む空氣であつて、僅かに樹々の綠や新建築の綠瓦などは有るにしても、綠が北京を埋め盡すとは考へられない。即ち澱んだ鈍重な千年の古都には、原色その儘の青い空と黄の瓦と朱門とが、灰色に黒い壁の間に象眼されてゐる樣なもので、新時代の生き生きとした太陽を感ずれば感ずる程、原色に塗り潰される北京の色調は、吾々には調子外れで異常だと感じないわけには行かないのである。

色彩に纖細すぎる訓練だか感性だかを有つてゐる日本人が、この原色の景色の中に投げ込まれると、ためらひに似てどぎまぎし、感覺に異常を來たしたと感ずるのは實に正直である。それが甚しいのになると、色彩に殆んど無感覺になつてゐるのを顧ないで、やれ此の着物の色が似合ふの、あの服裝や持物は似合はないのと、獨り勝手な色彩論を辯ずるので、私は時に、日本人（殊にも婦人）の色彩常識を叩き直す必要を痛感して歎くのである。此の不透明な埃の多い大陸の空氣の中で、そしてどんなものでも線の太い油ぎつた環境の中で、最も貧相で似合はないものは日本衣裳の色彩と模樣である。立派なものを身に着けて居る人には濟まないやうなことではあるが、どうもこちらで見慣れた眼には、立派でも美しくもないのである。何となく線が細くて弱々しい輕いものにしか見えないのである。だから私の結論を急げば、日本衣裳の高貴なもの、精彩に過ぎるものは、こちらでは勿體ないし、着映えがしないから、着潰すのは全く惜しいといふ一言に盡きるのである。

二

ところで今度は少し心理的のことに入つて、中國民衆の好き嫌ひを考へて見る。色（顏料）の中で、何が一番中國人が喜ぶかと言へば、それは誰も知つてゐる樣に「紅」である。お芽出度いことを凡べて「紅事」と言ふのからでも、察せられる。結婚は人生の大事であつて「喜事」とも言ふが、其の式場に行つて見ると、赤い布や紙にお芽出度い字を帖つたり書いたりしてある聯が所狹しと貼つてある。贈物の第一なのである。それから正月の門聯（對聯）も必ず赤い紙に黒い墨で書くのである。出産があると直ちに鷄卵を赤く染めて親戚や親友に送る。之れを「喜果」と言ふ。朱門大邸などといふ例の門の柱や扉を眞赤な朱色に塗るのは、元は官員にのみ許されたものださうだが、今では衆庶皆自由勝手で、大門は殆んど全部朱塗りである。招待狀や名刺も念の入つたものは赤いのを使ふことになつてゐる。そして最後に嫁入前の姑娘や子供のズボン（褲子）は眞赤なもので本當に愛くるしいし、五六十歳の老婆が半分禿げ上つた薄い髮の毛

に挿してゐる赤い花簪も、言ふに言はれぬ風情が漂つてゐるものだ。大體これ位擧げた丈けでも、中國民族が如何に「紅」が好きだかは判ると思ふ。

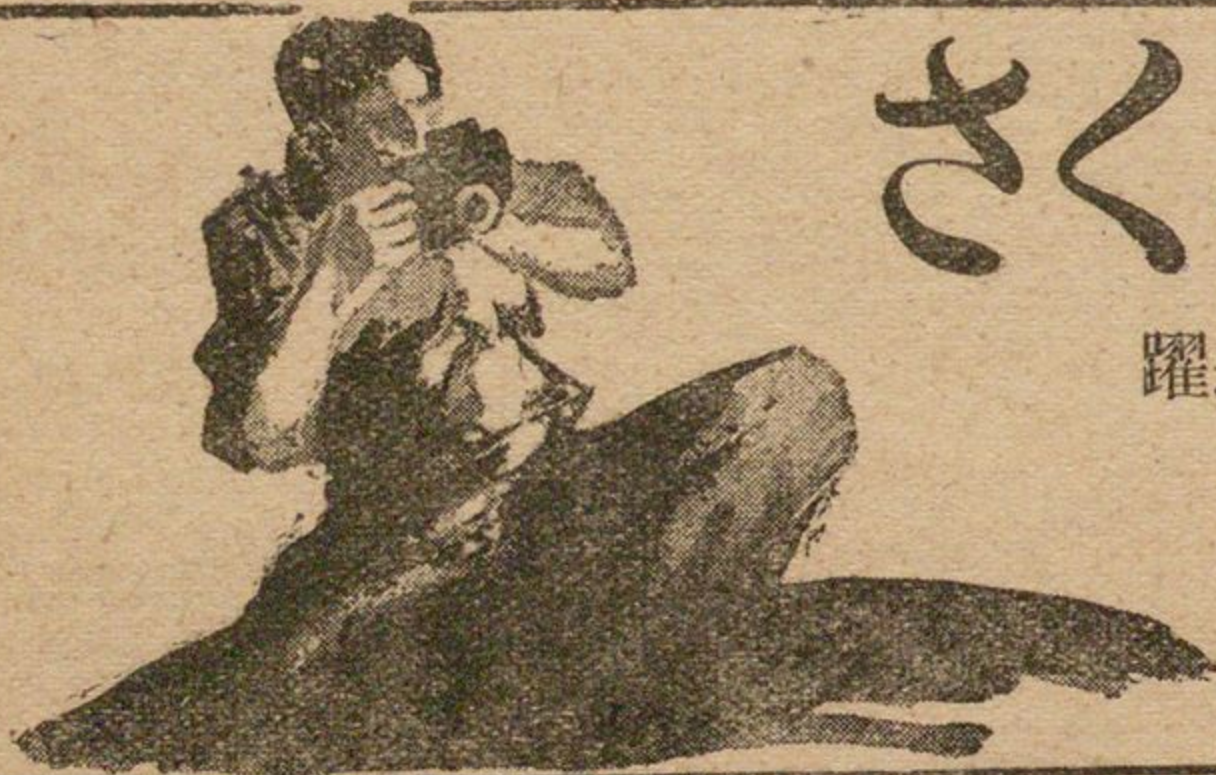
「紅」は日本讀みだと「べに」とか「くれなゐ」で、桃色に近い赤だが、こちらでは色合は「赤」と混同してゐる。即ち赤味の色は俗では殆んど皆「紅」と言ふ。「赤」の方は「赤背」とか「赤脚」とか言ふ衣服を纏はない裸の時に使つたりすることが多く、「赤貧」「赤手」は極貧と空拳の意味で「赤」はさういふ風に使はれる方が多い樣だ。朱も纁も「あか」だが、通俗では、はつきりと色合を區別して使ひ分けはせずに、通じて赤い色は「紅顏色」と言ふのだ。血色も「紅」だから從つて醉顏も「紅」であり、太陽もインキも朱墨も「紅」である。(時に朱紅などとは言ふ)

扨てさういふ「紅」を喜ぶ民族心理から、俗語の意味がずつとはつきりして來るものがある。勿論日本語とは何の關はりもない。その第一は運が佳いとか幸運とかの意味に使はれる紅人・紅人兒・紅運等であつて、「紅運的人」は幸運の人である。從つて、芝居の役者は「角」であるが、その流行役者は「紅角兒」である。第二は商家の緣起のいい言葉で、純益金を紅利・紅益と言ひ、店員が貰ふ紅利を「花紅」或ひは只「紅」と呼び、紅利を分け與へることを「分紅」と言ふ。又同じく商家で、交易の少ない品物を「黑貨」とか「冷貨」といふに對して、交易の多い品物を「紅貨」又は「熱貨」と言ふ。

序ながら、今は餘り使はず又右の樣な芽出度い心理が働いてゐるのではないが、日本に無い言葉で、「紅幫」と「女紅」とがある。紅幫は青幫に對するそれではなくて、元來西洋人(毛唐)を「紅毛人」と呼んだところから、西洋式の仕事をするものを「紅幫」と呼んだので、例へば「紅幫裁縫」とか「紅幫木匠」などと言つたものだ。「女紅」の方も今は言はぬさうだが、これは婦女の賃銀をとつてする針仕事のことであつた。

三

次ぎに嫌ひな色、「白」に就いて述べる。「白」は嫌ひな色と言へば少なからず語弊が有るのであつて、嫌ひな色は寧ろ黑だと言へる。だから「白」はお芽出度くない色とか、愼しみの色とでも言つた方がよいかも知れぬ。即ち喪事葬儀を「白事」と言つて、其時に用ひる色が白である。

歴史的に喪事にはどうして白いものを用ひて來たかなどといふ專門的のことは先づ省略して、現行の「白事」に就いて目立つてゐることを書き記して見ると、人が死ぬと白い喪服を着る。これを「白孝」と言ふが、即ち白色の孝服である。喪服の制度は即ち親等制度であつて、それには斬衰・齊衰・大功・小功・總麻の五級がある。此の喪服制度は極く古く即ち殷の頃から連綿として傳つてゐるものである。そして死者に對する親等に依つて、斬衰三年とか總麻三月とかと、喪服の輕重と着用期間の長短とが判然と制定されてゐる。死者に對する親疏の差で、服制と期間との二重の差等をつけてゐるのである。——喪服制度の詳細は今全部省略する——それで白い喪服即ち「白孝」はどういふ風に着るかといふと、出棺前の七日宛を一期として三期・五期・七期・九期といふ樣に、必ず奇數の期の間、葬式の前に着てゐるのである。棺が家に置かれる期間は、身分や貧富の差に依つて不定である。從つて「白孝」の期間も不定だといふより外はない。一番重い喪服を着ける時、白麻の袖無しの樣なものを上から羽織つて、同じく麻の繩の帶をしめる。麻の繩の

帶をしめるのは子や孫だけで親類は唯の白布である。此の「白孝」につきものは「白帽」と「白鞋」であるが「白鞋」は白い喪服を脱いでからも一年間は必ず穿いて居るのである。葬儀が濟むと「白孝」は脱いで、今度は灰色の「灰服」を着るが、其の期間は一年である。灰服を着てゐる一年間は「白鞋」を穿いて居るのである。「白鞋」の踵の上にあたる處に、一寸幅位の紅い布か、黒い布が縫ひつけてあるが、あれは祖父母の時は紅で、父母を失つた者は黒いのをつけてゐるのである。そして紅は六十日、黒は百日の間着けて置く。其の期間が過ぎると全部白い鞋となつて都合一年間穿くのである。

「灰服」一年（十二箇月）が過ぎると、次には「黒服」を二年間（但し實際は十五箇月）着て、そして鞋も「灰鞋」に代るのである。

以上で三年喪の服制の大體を述べたのであるが、帽子も子ならば全然白帽だが、孫ならば白帽の上に一寸紅い布をつけてゐるとか、靴下も白いものの方がよいとか、まだまだ述べたいこともあるが、大體はもう察して戴けると思ふから略して、只だ三年喪の期間に就いては古來學者の間に說があつて、二十七箇月といふ說と、二十五箇月といふ說とがある。喪服制度はその樣に研究すべき重大な問題である。又「白孝」と「灰服」を一緒にして「素服」といふが、漢民族は「私は素服であります」と言つて自分の服喪中のことを言ひ表す。又門には「守制」と薄紫の紙に墨書して帖つてあるのを時々見掛けるが、あれは「守孝」の意味で、兩親の喪に服してゐることである。由來漢民族は厚葬主義で、厚葬に關する色色のことも充分考察すべき古來の大問題である。

この頃のハイカラさんは腕に黒い腕章をつけてゐる。あれは勿論歐風であつて感心しない。何千年の立派な動かすことの出來ない服制があつて、半面それに從つてゐながら、他面尙ほ歐風の腕章をするといふ二重なことを敢へてしてゐるらしいからである。（尤も支那服でなく洋服着用の場合は別に考へねばならぬが）

先に言つた「紅」を喜ぶ心理から、「紅運」とか「紅利」などといふ俗語が出來たことと全く同じ筆法かどうかすこぶる怪しいのだが、「白」を俗語で使ふと、色々と非常に面白い、適切で簡明な言葉が澤山出來るのである。其の一つは若干は色と關係があるが、其の色の無いものといふ意味で「白」を使ふと、「白描」と言つてデッサンの樣な繪を言ふ。「白煮」は水たきで、醬油を加へない煮方。それから、稍々進歩すると、無駄といふ樣な意味になつて、「白費」は無駄に費すこと、例へば「白費一番心」は無駄に心配した、心配しても何にもならないといふこと。そして「白說」は無駄口をきくこと。「白閒着」はすることが無いで、此の「白」は「無」と同義になり、「白食」「白吃」は只食ひ只飲みであり、「白送」は無代呈供の意味となる。

其の二は「卑近」の意味を寓して、「白話」と言ふのは口で言ふ音聲言語のことで、「白話文」は口語文卽ち現代用ひる音聲言語と餘り差違のない文字を使つて書いた文章のことである。

終りに、これは稍々趣が違ふけれども、「白果」は銀杏のことであるのを、俗では鷄卵をも「白果」と言ひ、良質の高粱酒を「白乾兒」、夏のはじめの目に見えない搔ゆい毒蟲を「白蛉子」と言ふ。「白」に關係して、全く日本に無い俗語を集めて見ると、こんな風になる。

「紅」と「白」を通じて、少しでも中國の民俗や俗語の味を漂はすことが出來たとすれば、私のこころは自ら「白活」（醉生夢死？）ではないのである。

（筆者は國立北京大學講師）

可園雜記

加藤新吉

北支の編輯に就いて、可園雜記に就いて、屢〻各方面から御忠言や御批判や御鞭撻を賜はる。御返事は差上げたり差上げなかつたりであるが、御芳志はありがたく感謝してゐる。今日も前線の將兵二氏、何れも未知の方から便を戴いた。その一人は、私の書いた支那家屋の壁に就いて新工夫を記して居られる。曰く「支那家屋の壁の殺風景なことお說の通り。そこで或部隊で酒保兼會議室を造るに當り、何の家でも持て餘してゐる石炭の焚き殼を碎いて篩にかけ、石灰と麻袋のすさとを加へたものを壁の上に塗つた。落付いた色調でもあり、衣服が觸れても汚れるやうなことはない。御參考迄に」といふのである。

前線の軍人からの軍務の餘暇を割いての便である。その好意を無にしない爲に、建築專門家に研究して貰ふことにした。北支に於ける邦人の衣食住は根本的に研究する必要がある。生活の全面に亘つて倫理的健全性と科學的合理性とを確立する必要がある。それをしなければ日本人の大陸發展は覺束ないのである。いつもそれ等のことに關心をもつ者として、私自身も新しい壁を試してみたいと思ふ。が、實をいふと、我々は近々可園を立退くべきことを命ぜられてゐる。家屋拂底の北京、激增はしたが事情に暗い邦人は已むを得ずあらゆる廢屋陋屋に我慢して住んでゐる。我々もおばけの出さうな可園の廢屋に應急の修理を加へて住んだのであつたが、爾來三年、いろいろに手を加へて、どうやら人間の住居らしくなつたら立退である。今度引越す家も亦元の可園みたいなのかも知れないと思ふとうんざりするが、さういふ家だと、新工夫の壁を塗る部分はかなり澤山あるであらう。

思へば可園の借家爭議も久しくなつた。が、これは時代風景である。北京といふ都ができて以來、今日程人口の殖えたことはないといふ歷史的事實と關聯してゐる。新來の日本人が苦勞して探して借りて修理して落付いた頃合を見はからつて、家賃値上か立退かと來る、賣るから出てくれ嫌なら買つてくれと來る、さうして昔から幾多の異民族を困惑せしめ疲勞せしめ敗退せしめた支那民族の歷史的性格とも關聯してゐる。現に北京に起つてゐる無數の借家爭議と全然その性質を一にしてゐるのである。だから、この借家爭議は小なりと雖も、日本の大陸發展と關係があり歷史的意義があるのである。

自ら家主と稱し、領事館警察を煩して我々を追立てようとした龔某は、其後問題を○○○○○に持込んだ。我々は呼出された、實情を愬へて家賃値上で調停されんことを歎願した。その頃、前○○國大臣某、華北交通に對して可園を五十萬圓で買つて呉れと申込んだ。他の國策會社にも賣込んでゐるといふ噂であつた。商賣には熱心な御仁で、いかにもありさうなことだとの評判であつた。最近聞かされたところでは、可園の買主は他ならぬこの前大臣氏で、龔某は名義を貸したのだといふことである。

とまれ、我々は謹しんで○○に服して立退くことを決心した。勿論、更めて決心する迄もなく、それに抗する日本人といふ者の居よう譯はないのである。かくて、借家爭議も、可園雜記も、あと數箇月で皀を告げる豫定である。（筆者は華北交通資業局長）

支那關係圖書紹介

（6）

文化方面

◇**東亞民族の指標**（西山庸平著）序論に於ける支那事變の使命、本論における三國協同體の指導精神に關する問題において東亞新秩序の思想的、倫理的方面を論述してゐる。

◇**世界の動向と東亞問題**（善隣協會善隣高等商業學校編）支那の資源、經濟、民族、社會、思想、文化に就て系統的知識を提供すると同時に、南方問題、回教圏の問題、支那の邊疆問題並に東亞文化圏につき、歷史的に考察せるもの、執筆者は宮本武之輔、大川周明、松井石根等である（生活社）

◇**東洋文化史上の基督教**（溝口靖夫著）ペルシヤ、印度、支那を通じて基督教と文化との關係を研究論述したもの（理想社）

◇**回回**（小林元著）これは、回教圏全體の觀點から、回々、殊に滿支に於ける回々に就ての現地報告書である。特に旅行記風に敍述されてゐる（博文館）

◇**支那基督教史**（比屋根安定著）支那に於て極めて廣く行き亙れる基督教に就て知ることは、文化事業工作上必要である（生活社）

◇**老子精髓**（伊福部隆彥著）老子の現代語譯によつて著者は、この東亞の哲人の眞の姿を我々の前に接せしめようとしてゐる（同文館）

◇**孔子**（武者小路實篤著）孔子とその弟子達の生活を描いて、人類幸福の大道を判り易く指示してゐる（大日本雄辯會講談社）

◇**孔子とその生活**（田中貢太郎著）大聖孔子の濟世救國の大精神と、その生涯を敍述したもの（東海出版社）

◇**支那の歷史と文化**（ラトウレット著、岡崎三郎譯）上、下二冊、支那文化研究の入門書として有名である（生活社）

◇**康熙帝**（ヴーヴェ著、後藤末雄譯）學問の頂點に立つ大帝の時代と、人々を知り得る書である（生活社）

◇**大東亞民族の途**＝共榮圈の目標（龜井貫一郎著）（聖紀書房）

◇**僕の支那觀**（村田懋麿著）綜合的な支那觀であり、支那及び支那人の眞相を畫かんとしてゐる（大日社）

◇**法律から見た支那國民性**（瀧川政治郎著）法律、裁判、犯罪などの面から見た中國國民の特異性はここにある（大同印書館）

◇**これが支那だ**（山崎百治著）（栗田書店）

◇**生活習慣北支篇**（米田祐太郎著）（教材社）

◇**支那雜記**（佐藤春夫著）文壇に於ける支那研究家としての作者が、支那の文化を論じ、人物文學を評し、傳統を語り詩を鑑賞し、紀行について述べた著である。（大道書房）

◇**北京の市民**（羅信耀著、式場隆三郎譯）北京の一青年作家が北京クロニクルに連載した原題『吳の冒險』の譯出である。北京人の書いた北京人の生活、信仰、風物に就て、多少しつこさを感ずるまでに知らせてくれてゐる。これは、更に下卷と併せて、北京人の生れてから死ぬるまでの行事並びに習慣を知ることが出來ると思ふ（文藝春秋社）

◇**現代支那思想の諸問題**（神谷正男著）＝生活社＝◇**支那國民性と其の由來**（高山峰三郎著）＝古今書院＝◇**東洋道德研究**（西晉一郎著）＝岩波書店＝◇**興亞の眞理**（井本益喜著）＝非凡閣＝◇**支那カトリツク教布教史**（興亞院政務部編）＝◇**支那人の精神**（魚返善雄譯）＝目黒書店＝◇**現代支那思想史**（神谷正男譯）＝生活社＝

紙面の關係で一と束に並べて著者及び發行元には甚だ失禮と思ふが、右何れも眞面目な研究書であり、最近かうした支那關係書も謂ゆるキハ物師的氣分を一掃して眞面目な研究者の手によつて正確な支那紹介乃至は解剖が試みられつつあることはうれしいことである。（Y・H・生）

昭和十七年二月十五日印刷納本
昭和十七年三月一日發行

三月號（毎月一回一日發行）

會員登錄番號 一二六五〇八番

編輯者 北京・華北交通株式會社營業局 加藤新吉
發行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麹町區三番町一 第一書房 振替東京 六四二三三番 一四一五番 電話九段（33）三三四四番

一冊定價㊫三十錢（一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

廣告取扱 大阪市西區京町堀上通一丁目三五 一手取扱所 一新社 電話土佐堀九三九

胃腸疲労、栄養に

ビタミンV・B_1の不足は胃及び腸の活動低下を來し、各筋肉の無力狀態を起し食慾不振、便秘の原因となる。か樣な場合高單位のビタミンB_1劑「強力メタボリン錠」の服用は、根本的に胃腸組織を賦活して筋肉の緊張を調整し、その過勞を恢復すると共に、消化液の分泌を亢めて食慾を旺盛ならしめ、榮養素の吸收を促進し、以て疾病の治癒を容易ならしむ。

V・B_1含有量 一錠中〇・五ミリグラム

〔適應症〕胃腸疾患、食慾不振、胃腸無力症、病中及び恢復期患者並に妊・産・授乳時の榮養障害、疲勞の恢復等、

★包裝 一〇〇錠 三〇〇錠

強力メタボリン錠

製造發賣元 株式會社 武田長兵衞商店 大阪市道修町
關東代理店 株式會社 小西新兵衞商店 東京市本町

2(2)45

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年二月十五日印刷納本 昭和十七年三月一日發行（毎月一回一日發行）第三十四號
北支 定價三十錢